

北海道大学 2026 大学院文学院

Graduate School of
Humanities and Human Sciences
Hokkaido University



150th
HOKKAIDO UNIVERSITY

2026年度 北海道大学 大学院文学院



北海道大学
大学院文学院

Graduate School of
Humanities and Human Sciences
Hokkaido University



www.let.hokudai.ac.jp

文学院院长挨拶

「文學院」への誘い

こんにちは、文学研究院の教員で川端と申します。2024年4月から2026年3月まで文学院院长を務めます。私は1961年に札幌で生まれ、札幌で育ちました。1980年に北大に入学しましたので、もうずいぶん長くここにおります。クラーク博士の有名な言葉「Be ambitious!」は一般に「若者よ、大志を抱け」と訳されていますが、皆さんの先輩、後のアラビア石油の創始者である山下太郎は、このambitiousという言葉にはより「野心的」な意味合いが込められているとして、「若者よ、山師たれ」と説いています。

これまで北海道の地で、東西冷戦、高度成長、バブルとその崩壊、デフレと停滞、地政学リスク等をみてきましたが、大きくなりそうな時代のうねりの中で、現在の本研究院は全世界的にみても有望な山師的集団である、と私は思っています。ウェブサイトをみていただければわかりますが、多様で魅力のある文系や文理融合系コンテンツのほぼすべてが揃っています（とくに日本最北に位置する拠点大学の役割を考慮しています）。これだと思ふ領域を選んで深くかつ学際的に学ぶことができる環境がありますし、野心的で親かな学部生約620名、修士課程学生約230名、博士課程学生約180名、文学院教員約130名と事務職員約20名が日夜仕事を全うしています。北大は札幌の中心に原生林や農地を含めて広大な敷地を占めており（文学部はその真ん中に位置します）、さながら北海道全域の箱庭のようなイメージです。この箱庭での演習から始まって、北海道、北方圏、世界（real and cyber）をフィールドとして私たちは活動しています。

私の文学部と山スキー部の後輩で宗教学・仏教学を専攻した男がおります。建設機械の会社に入社した後に本格的にスペイン語を学んで南米赴任、あの広大な南米大陸で油圧ショベルの保守に奔走してきました。私が1997年にエクアドルのチンボラソ山に赴いた際にはチリから駆けつけてくれ、そのときの風貌はほぼ現地人のそれでした。現在、彼は日本でITを活用して、世界各地の工事現場で作動する機械の保守システムをコントロールしています。北大をホームベースに、様々な言語を交わしながら、飄々と世界の山を歩く、山師の一人と言えるでしょう。

北海道や日本は過去数十年間、経済、学生の就職に関しては受難の時代が続きましたが、その中でも時とともに私たちへの社会的要請は増えてきました。今後日本がより知的に経済的に豊かになる光がみえてきた中で、様々な業態の企業、団体、組織などが求める人材を供給する主要な源泉になりつつあります。私はそのような人材が北大文学院から輩出することを目標にしています。おもしろき人生の山師たれ！



北海道大学大学院文学院院长

川端 康弘 かわばた やすひろ

CONTENTS

文学院概要

文学院の特徴・履修モデル	03-04
特色ある学際的教育プログラム	05-06
支援制度	07-08

専攻・講座・研究室紹介

人文学専攻	09-12
哲学宗教学講座 哲学倫理学研究室	13
哲学宗教学講座 宗教学インド哲学研究室	14
歴史学講座 日本史学研究室	15
歴史学講座 東洋史学研究室	16
歴史学講座 西洋史学研究室	17
歴史学講座 考古学研究室	18
文化多様性論講座 文化人類学研究室	19
文化多様性論講座 芸術学研究室	20
文化多様性論講座 博物館学研究室	21
表現文化論講座 欧米文学研究室	22
表現文化論講座 日本古典文化論研究室	23
表現文化論講座 中国文化論研究室	24
表現文化論講座 映像・現代文化論研究室	25
言語科学講座 言語科学研究室	26
スラブ・ユーラシア学講座 スラブ・ユーラシア学研究室	27
アイヌ・先住民学講座 アイヌ・先住民学研究室	28
在校生が語る「エルムの森の日々」case 1	29-30

人間科学専攻	31-32
心理学講座 心理学研究室	33
行動科学講座 行動科学研究室	34
社会学講座 社会学研究室	35
地域科学講座 地域科学研究室	36
修了生が語る「エルムの森の日々」case 2	37-38

TOPICS

研究環境	39
関連組織	40

インフォメーション

学生生活	41
入試から入学まで	42
進路・就職	43-44

キャンパスマップ	45
----------	----

★ 文學院の 特徴・履修モデル

文学院は、哲学宗教学、歴史学、文化多様性論、表現文化論、言語科学、スラブ・ユーラシア学、アイヌ・先住民学の7講座からなる「人文専攻」と、心理学、行動科学、社会学、地域科学の4講座からなる「人間科学専攻」との2専攻から構成されています。

学際的な人文・社会科学諸分野の学修を通して、俯瞰的な視野から人間と社会をめぐる知を身につけることができます。

- 多彩な11講座20研究室からなる2専攻。100名を超える教員が深く柔軟な学びを支えます。

人文学専攻

Division of Humanities

- 多様な分野を網羅しており、人文学を総合的かつ領域横断的に学ぶことができる人文学専攻。大学院生のみなさんの「学びたい」気持ちに柔軟に応えるカリキュラムとなっています。
- 文献資料・史料に向き合うとともに、現場にも足を運ぶことで、地域や社会に役立つ実践的・実用的な研究成果を豊富に生み出しています。
- スラブ・ユーラシア学、アイヌ・先住民学など、北海道の地域的な特性を活かした「ここでしかできない学び」があります。

哲学宗教学講座

- 哲学倫理学研究室
- 宗教学インド哲学研究室

歴史学講座

- 日本史学研究室
- 西洋史学研究室
- 東洋史学研究室
- 考古学研究室

文化多様性論講座

- 文化人類学研究室
- 博物館学研究室
- 芸術学研究室

表現文化論講座

- 欧米文学研究室
- 中国文化論研究室
- 日本古典文化論研究室
- 映像・現代文化論研究室

言語科学講座

- 言語科学研究室

スラブ・ユーラシア学講座

- スラブ・ユーラシア学研究室

アイヌ・先住民学講座

- アイヌ・先住民学研究室

詳細は **p.09**

人間科学専攻

Division of Human Sciences

- 人間と社会に関する総合的な学修ができます。
- 大型研究プロジェクトの実績を活かした世界レベルの研究に基づく高度で実証的な学びができます。
- 実験、実習、フィールドワーク等、多彩な研究手法が学べます。
- 科学的アプローチに基づく人間科学研究の国際的拠点を活かした学びができます。

心理学講座

- 心理学研究室

行動科学講座

- 行動科学研究室

社会学講座

- 社会学研究室

地域科学講座

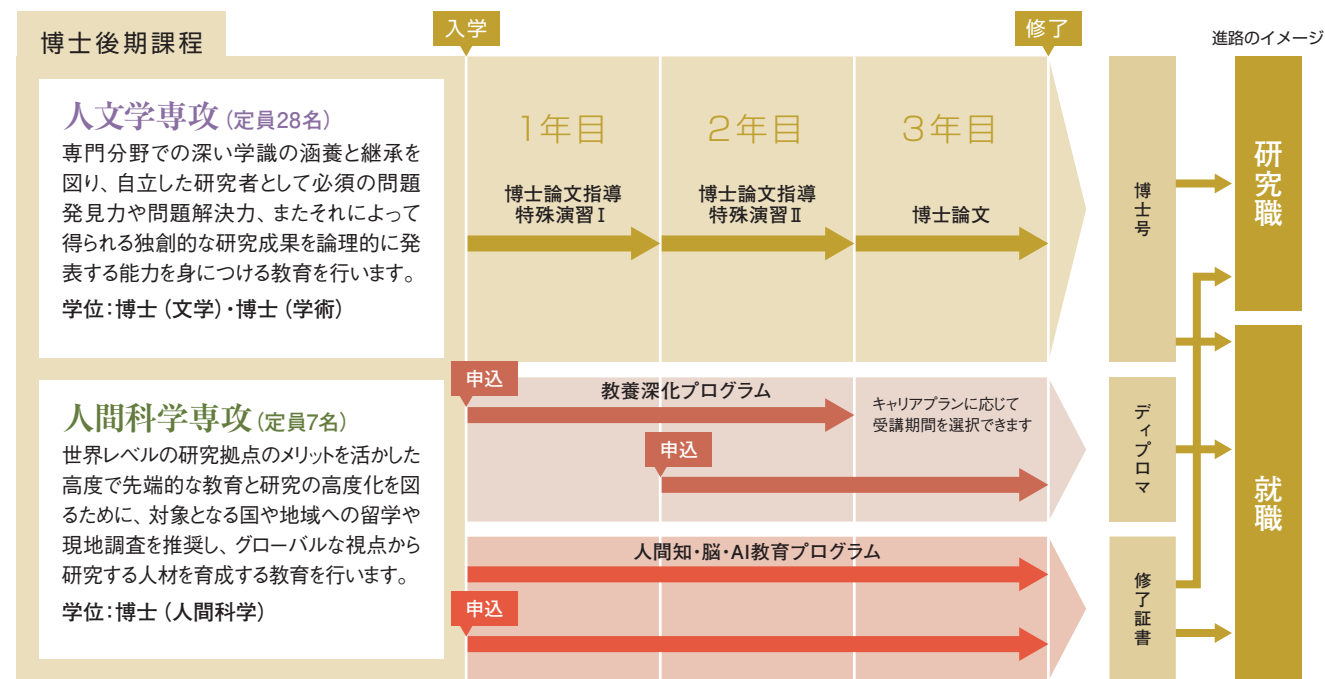
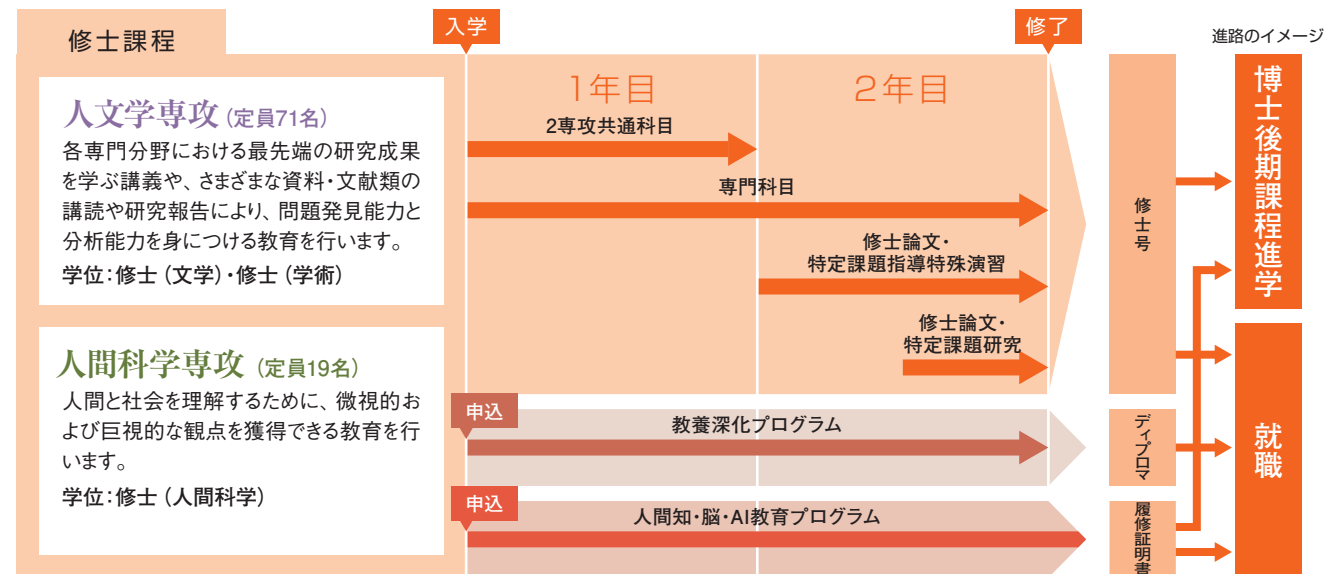
- 地域科学研究室

詳細は **p.31**

- 2専攻共通科目を開講。
俯瞰的な視野で
人文・社会科学を広く学修します。

2 専攻共通科目として「人文社会構造論」「複合環境文化論」「多文化共生論」「総合社会情報論」「研究倫理・論文指導特殊講義」を開講しています。各専攻の所属講座が協力で展開する2 専攻共通の授業です。専攻をまたいで人文・社会科学の多様な分野を広く学修することを通して、俯瞰的な視野から人間と社会を学ぶと同時に、学際的な研究手法の知識を深めることができます。

- ## ● キャリアプランに応じて必要な学修ができる履修モデル



教養深化プログラム、人間知・脳・AI教育プログラムの詳細は **p.05-p.06**

- ## ● 文学院が目指す人材像

人文学専攻

- 各領域に関わる理論的あるいは実証的な基礎研究、さらに現代社会の諸問題をめぐる研究において、それぞれの研究の方法を身につけ、これまでの研究を適切に理解するとともに、必要に応じて現地調査を含むデータ収集とその処理・分析を的確に行う能力を備えた人材。
- 異文化に対する知識とその深い理解力、さまざまな地域や民族がかかえる現代的課題を具体的に把握する観察力と分析力を基盤とした、高度の専門性を必要とする職業を担う人間としての総合的な能力を備えた人材。

人間科学専攻

- 認知心理学、社会心理学、認知科学、行動科学、社会学、地域社会学、人文地理学、社会生態学に関する専門知識を備えた人材。
- 人間と社会の理解に向けた科学的・実証的なアプローチにより研究を遂行できる能力を備えた人材。

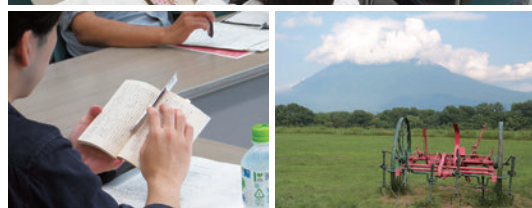
★ 特色ある学際的教育プログラム

教養深化プログラム

高度な専門知識を持った 即戦力人材に成長

教養深化プログラムの受講希望者は、
専門研究を深めていくかわら、
人文・社会科学諸分野の総合的な学修と、
社会で役立つジェネリックスキル^{※1}を学修することにより、
高度な専門知識を有し、社会で即戦力となる人材へと成長していきます。
博士後期課程の学生にとっても幅広いキャリアへの扉が開けます。

※1) ジェネリックスキル
社会人として活躍するための能力のこと。具体的には「知識活用力」、「課題解決力」、「コミュニケーション力」、
「チームワーク・リーダーシップ」等の社会で役立つ汎用的な力を指す言葉として使われています。



プログラムの特徴

人文・社会科学の総合的な学修

研究室単位の専門科目の学修とともに、人文・社会科学の諸分野を横断する学修プログラムを発展的に学びます。

文理融合と学際的な学修

数理的思考やデータの分析・活用方法を学ぶとともに、自然科学の最先端の知に触れ、自らの専門知識をベースに自然科学への理解を深めます。

社会と繋がる実践を重視

先端人材育成センター・CoSTEP^{※2}と連携した実践的なプログラムにより、高度なジェネリックスキルが身につきます。

※2) CoSTEP:北海道大学大学院教育推進機構オープンエデュケーションセンター・科学技術コミュニケーション教育研究部門。科学技術の専門家と市民の橋渡しをする人材を育てる、教育研究組織。

受講の流れ

北海道大学大学院 入学

修士課程 / 博士後期課程

〈受講対象者〉

専門分野を問わず北海道大学に所属する全ての大学院生

教養深化プログラム申込

原則として希望者全員が参加できます

教養深化科目群

●教養深化特別演習(基礎・総合)

基礎:多角的に分析し複合的に把握する能力を身につける。
総合:基礎で習得した能力を実践を通じてさらに向上させる。

●サイエンスリテラシー特別演習(基礎・総合)

数理的思考とデータ処理・活用方法を知り、自然科学研究の最先端に触れ、的確に伝えるスキルを学ぶ。

●教養深化特別講義 多様な視点から物事を俯瞰的に捉える力を養う。

ジェネリックスキル科目群

●ジェネリックスキル特殊講義

「キャリアマネジメントセミナー」仕事において必要となる実践的なスキルや考え方を身につける。

●ジェネリックスキル特別演習

「キャリア形成」企業等で活躍するゲストの講演からキャリア形成の視野を広げる。

修了要件を満たすとディプロマを取得 国内外の企業、公的機関等で活躍できる人材に!



教養深化プログラムの詳細は、右のQRコードよりご覧いただけます。

<https://cep.let.hokudai.ac.jp/>

人間知・脳・AI教育プログラム(CHAIN^{※3}教育プログラム)

「人間」にも科学技術にも通じた 高度人材に成長

人文社会科学・脳科学・AI研究が交差する地点で

「人間」について多角的に学ぶ文理融合型教育プログラム。

人文社会科学、神経科学、人工知能等の各領域を専攻する大学院学生が、

所属大学院を超えて学際的共同研究に参画し、

関連する知識・技能を学びながら、それぞれの専門的知見・技能をも深めていきます。

必要な単位を修得した履修生には、修了証書が授与されます。

※3) CHAIN
Center for Human Nature, Artificial Intelligence, and Neuroscience
人間知・脳・AI研究教育センター



プログラムの概要

プログラム・ベースド・ラーニング

人文社会科学、神経科学、人工知能の各領域の中から、自分の専門としない分野の基礎知識とスキルをコースワークを通して学ぶ。

プラットフォーム・ラーニング

国内外から招へいた第一線の研究者によるSS^{※4}とWS^{※5}に参加。学際的議論を通して研究の最先端に触れ、ネットワーク形成も行う。

プラクティカル・ラーニング

学内外の研究室へのインターンシップ、海外の研究室への研究留学、連携企業でのインターンシップを通して、自ら得た知識・スキルを実地に生かす。

※4) SS:サマースクール ※5) WS:ウィンタースクール

履修モデル

修士課程1年から5年間で履修する場合

人文社会系	自然科学系
●修士課程1年目 人間知序論I,II/入門ベジアン・モデリング/ディープラーニング演習/SS/WS	●修士課程1年目 人間知序論I,II/ディープラーニング演習/脳科学入門/SS/WS
●修士課程2年目 脳科学入門/SS/WS	●修士課程2年目 哲学特殊講義/SS/WS
●博士後期課程1年目 国内研究室インターン/SS/WS	●博士後期課程1年目 研究留学/SS/WS
●博士後期課程2年目 研究留学/SS/WS	●博士後期課程2年目 企業インターン/SS/WS
●博士後期課程3年目 SS/WS	●博士後期課程3年目 SS/WS

博士後期課程1年から3年間で履修する場合

人文社会系	自然科学系
修士課程1・2年目 各自専門の修士課程を修了	
●博士後期課程1年目 人間知序論I,II/国内研究室インターン/脳科学入門/ディープラーニング演習/SS/WS	●博士後期課程1年目 人間知序論I,II/哲学特殊講義/研究留学/SS/WS
●博士後期課程2年目 研究留学/入門ベジアン・モデリング/SS/WS	●博士後期課程2年目 脳科学入門/企業インターン/SS/WS
●博士後期課程3年目 SS/WS	●博士後期課程3年目 SS/WS

各大学院での博士号取得と同時に「人間知」の修了証書を取得

本プログラム終了後は、研究者として学際的研究に従事したり、「人間」にも科学技術にも通じた高度人材として企業に就職したりといった道があります。博士後期課程修了者の就職も支援しています。



人間知・脳・AI教育プログラムの詳細は、右のQRコードよりご覧いただけます。

<https://www.chain.hokudai.ac.jp/education/>

★ 支援制度

この充実度は北大文学院ならではの 研究キャリアを国際的かつ豊かに積み重ねることができる支援制度

北海道大学大学院文学院には、独自の研究支援制度と豊かな研究環境が整っています。「国際的な研究キャリアを築きたい」という高い志と、「経済的な負担をできるだけ軽くしたい」というリアルな研究生生活事情に応える充実の支援環境を存分にご活用ください。2021年度より博士後期課程学生への多角的な支援が拡充され、若手研究者がより安心して研究に専念できるようになりました。

共生の人文学プログラム 大学院生の研究活動にかかる経費支援

旅費支援

大学院生の国際学会・全国学会での研究発表および研究調査にかかる旅費を支援します（主として航空運賃の支援、宿泊費は含まれません）。

利用した先輩の声

渡航費を気にすることなく、国際学会にチャレンジできました。学会で国内外の研究者と交流することで、研究ネットワークを広げることができました。発表をもとに論文を執筆し、学術雑誌投稿につながりました。

校閲費支援

国際学会・国際研究集会での発表および国際学術雑誌、文学研究院の英文ジャーナル等への積極的な投稿を促すために、大学院生に対して発表原稿や投稿原稿の校閲（英文等の添削）料を支援します。

利用した先輩の声

2021年度より支援の上限が増額され、より使いやすくなりました。支援を受けることで、論文執筆スキルと語学力の両方が磨かれます。

在学留学生向け支援

日本語添削・校閲

文学院では、日本語を母語としない在学留学生向けに、日本語添削・校閲を行っています。学位論文のほか、発表応募原稿、発表読み上げ原稿など研究の進捗に資するものが対象です。

利用した先輩の声

日本語が不自然な理由の説明、修正の提案は大変わかりやすく丁寧です。今回の論文だけではなく、今後の日本語での研究活動の参考になります。

若手研究者支援セミナー

大学院生支援セミナー

文学院の新入生向けに、大学院生が受けられる支援全般を紹介するセミナー。文学院だけではなく、全学で行っている支援についても紹介します。

申請書の書き方セミナー

学術振興会特別研究員への申請を支援するため、申請書を書く心構えや基礎情報を提供します。特別研究員に採用された若手研究者や審査経験のある教員に経験談やアドバイス語っていただきます。

申請書の書き方相談会

学術振興会特別研究員への申請を支援するため、個別相談を通してより実践的なアドバイスを受け、採択に向けて申請書をブラッシュアップすることを目的に開催しています。

学術出版支援セミナー

学位論文を学術書として出版したい方向けの学術専門書の出版を支援するセミナーです。著書出版経験豊富な教員や出版社編集担当者からの話題とともに出版助成情報も提供します。

海外研究支援セミナー

海外の研究機関や大学で研究をしたい、学位取得後は、海外でキャリアを積みたい、海外でフィールドワークをしたい等、海外に研究の場を広げてアカデミックキャリアを積んでいくための「はじめの一步」を後押しするためのセミナーです。

社会連携セミナー

研究成果を広く社会に発信する研究アウトリーチや、専門知を活かして社会課題解決に取り組む大学院生・教員の実践例を紹介します。大学院生向けの学内外助成金の最新情報も提供します。

キャリアセミナー

キャリアパス支援セミナー

博士号取得後の進路について、文学院（文学研究科）で学位を取得した方がさまざまなキャリアパスプランについて紹介します。

就職ガイダンス

キャリアセンターおよび外部講師による講演、内定者の体験談、質疑応答を中心としたガイダンスです。

Advanced-COLA

人文・社会科学系の博士課程を修了後、産業界で活躍している企業人をお招きし、大学の中では知ることのできない企業活動の実態やその魅力を語っていただくとともに、人文・社会科学系の学位の意義についても議論するイベントです。（先端人材育成センターと共催）

研究環境・経済支援 文学院では、大学院生の研究環境の整備と経済支援に力を入れています。

学振特別研究員制度/フェローシップ制度

博士後期課程学生への研究および経済支援が拡充されています。文学院の大学院生がチャレンジできる制度は以下のとおりです。

●日本学術振興会特別研究員

学術研究の将来を担う創造性に富んだ若手研究者の養成・確保を目的に、日本学術振興会が博士後期課程学生、博士学位取得後5年未満の研究者に支給するものです。

▶大学院生(DC1・DC2)研究費:年額150万円以内、生活費相当額:年額240万円

●ExcellenceとExtensionの融合による未来社会の開拓者養成プログラム (EXEX博士人材フェローシップ)

科学技術振興機構の「次世代研究者挑戦的研究プログラム (SPRING)」による制度。科学技術・イノベーションの将来を担う優秀な博士後期課程学生への経済的支援およびキャリア開発を支援。

▶研究費:年額40万円+α、生活費相当額:年額216万円

●次世代AI博士人材フェローシップ

科学技術振興機構の「次世代AI人材育成プログラム (博士後期課程学生支援)」による制度。次世代AI分野 (AI分野及びAI分野における新興・融合領域) に特化した少数精鋭のプログラム。

▶研究費:年額30万円+α、生活費相当額:年間360万円

充実した図書室

北海道大学附属図書館本館と北図書館に加えて、文学部図書室を含む16の部局図書室があり、総蔵書数は約372万冊、貴重な北方関係資料の所蔵など、質・量ともに国内屈指の文献資料を誇ります。文学部図書室は、蔵書数約15万冊、受入雑誌数は約2,700種あります。北大生であれば、リモートアクセスにより、いつでもどこからでも蔵書検索や電子ジャーナルへのアクセスが可能です。



論文発表の場を提供

大学院生の研究成果および研究活動を広く内外に公表するために『研究論集』および『Journal of the Faculty of Humanities and Human Sciences (英文ジャーナル)』という論文発表の場を設けています。発表論文は、北海道大学学術成果コレクション (HUSCAP) 上で公開されます。



TA・TF・RA制度

●ティーチング・アシスタント (TA) 制度

学部および全学教育科目の教育補助として、優秀な大学院生をTAとして採用し、経済支援をしています。

●ティーチング・フェロー (TF) 制度

博士後期課程の優秀な大学院生をTFとして採用し、経済支援をしています。TFは、教員と分担しながら授業を担います。

●リサーチ・アシスタント (RA) 制度

研究プロジェクト等を円滑に進める研究補助として、優秀な博士後期課程の大学院生をRAとして採用しています。手当を支給することにより、研究に専念できる環境を提供します。



院生研究室

講座または研究室ごとに院生研究室が設けられています。博士後期課程学生専用の院生研究室も設置されています。



授業料減免・奨学金

入学科、授業料の納入が困難な学生に対して、入学科の減免または徴収猶予および、授業料の減免制度があります。また奨学金制度も利用できます。

院生図書費支援

大学院生は毎年、一定金額の範囲内で図書を購入することができます。購入図書は学位論文執筆期間中、優先的に利用することができます。

受賞成果

2024年度 受賞者情報 文学院の豊かな支援・環境を活用して、数々の研究成果が発表されています。栄えある受賞者が続々輩出されています。

- 日本社会心理学会 若手研究者奨励賞 日下部春野さん (修士課程)
- 日本社会心理学会 若手研究者奨励賞 竹西海人さん (修士課程)
- 日本人間行動進化学会 若手発表賞 竹西海人さん (修士課程)
- 中世文学会賞 小田島良さん (博士後期課程)
- 日本医学哲学・倫理学会年次大会 奨励賞 稲荷森輝一さん (博士後期課程)

このほかの年度の受賞情報は
<https://www.let.hokudai.ac.jp/research/award-record> よりご覧いただけます。



さらに詳しい支援情報は、右のQRコードよりご覧いただけます。

<https://www.let.hokudai.ac.jp/general/gshhs-portal#1-5>

留学支援

北海道大学では53か国の国や地域において、205機関と201の大学間交流協定を結び (2025年3月現在)、グローバル教育や研究を推進しています。文学院では、25大学等と部局間交流協定を締結し、そのうち13大学と「学生交流覚書」を取り交わし、独自の交換留学制度を設けています。文学事務部の国際担当が、文学院生向けの「留学ガイドブック」を発行し、部局間交流協定校および大学間交流協定校への留学を支援しています。

部局間交流協定校

- 台湾 国立雲林科技大学
- 中国 南京理工大学
- クロアチア ザグレブ大学
- イギリス サセックス大学
- フランス パリ・シテ大学
- 台湾 国立高雄大学
- 中国 香港特别行政区 香港大学
- イギリス ロンドン大学SOAS
- イタリア バドヴァ大学
- 中国 南京農業大学
- アメリカ アリゾナ大学
- イギリス マンチェスター大学
- ドイツ デュースブルク・エッセン大学

人文学を総合的かつ領域横断的に学ぶ

人文学専攻

思想・文化・歴史・地域・言語・文学の領域を幅広くカバー

北海道だから学べる
豊かな人文学の
世界がここに――。

■主な講義題目

哲学倫理学研究室	■英米哲学論文講読 ■フランス・スピリチュアリズム研究 ■現象学と意識・認知の哲学 ■応用倫理学文献講読 ■非古典論理学研究
宗教学インド哲学研究室	■宗教学と死生学・生命倫理 ■仏教学専門文献講読 ■インド哲学専門文献講読
日本史学研究室	■植民地朝鮮の社会と文化 ■明治憲法体制と国家の運営 ■近世蝦夷地在地社会論 ■古代法制史料の研究 ■中世日本社会論
東洋史学研究室	■アラブ・イスラーム史研究 ■オスマン朝史研究 ■中国史研究の諸問題
西洋史学研究室	■西洋古代史の諸問題 ■中近世ヨーロッパ史研究 ■中近世ヨーロッパ文献史料講読 ■フランス近現代の国家と社会 ■アメリカ史研究の射程 ■現代歴史学の諸問題
考古学研究室	■考古学と人類誌 ■文化財の保存と活用 ■物質文化と先史社会 ■考古科学の実践 ■環境考古学と動物考古学
文化人類学研究室	■生命論的人類学を求めて ■自然誌を描く ■身体性的人类学
芸術学研究室	■現代美術研究の現在 ■美学史研究 ■芸術学研究報告
博物館学研究室	■ミュージアムから社会を見る ■博物館と地域資料 ■動物と人の関係史
欧米文学研究室	■西洋古典古代・古代キリスト教をめぐる諸問題 ■英米文学研究 ■20世紀フランス文学研究 ■ロシアの文学研究
日本古典文化論研究室	■浮世草子研究 ■中世文学研究 ■源氏物語解析
中国文化論研究室	■簡朝亮『論語集注補正述疏』研究 ■明清民国文学研究 ■『朱子語類』研究 ■『品花宝鑑』精読
映像・現代文化論研究室	■映画・表象・表現 ■日本現代文化の諸問題 ■ジェンダー研究 ■視覚文化研究
言語科学研究室	■アイヌ語学の諸問題 ■日本語アクセント論 ■ロマンス語対照研究 ■日本語研究のトピックス ■古典日本語研究の方法と実践 ■認知言語学研究 ■ロシア語学・スラブ語学の諸問題 ■日本語比喩表現の研究
スラブ・ユーラシア学研究室	■スラブ・ユーラシア研究の基礎と方法 ■ロシア帝国論 ■中東欧・ロシア近現代史 ■ロシア文化論 ■中欧・バルカン半島の言語と社会 ■スラブ・ユーラシア地域の経済 ■中東欧比較政治論 ■北極域の国際関係 ■前近代ユーラシア環境史 ■比較の中の中央ユーラシア史
アイヌ・先住民学研究室	■先住民考古学の理論と実践 ■アイヌ・先住民政策史 ■アイヌ・北方先住民の宗教 ■先住民の言語と文化 ■アイヌ・北方先住民文化 ■先住民と交差性(インターセクショナリティ)

■修士・博士研究テーマ例

哲学倫理学研究室	○修士 PVS患者に対する延命治療の倫理的妥当性の検討―AHNIに焦点を当てて― / On Correspondence Pluralism (対応多元主義について) ●博士 Philosophical Intuitions in the Free Will Debate : Unraveling Boundaries and Insights
宗教学インド哲学研究室	○修士 女性霊性運動研究再考――リリーアン・アイズラー研究を中心に / 初期シャンカラ学派における無明論の研究 サルヴァジュニャートマンを中心に ●博士 Organ Transplantation Metaphors A Comparative Corpus-Based Study of Life Depictions in Newspapers
日本史学研究室	○修士 室町幕府・鎌倉府間の境界領域における越後守護上杉氏の位置づけ / 鎌倉末期における東寺領播磨国矢野荘例名の確立過程 ●博士 第二次世界大戦後の南サハリンにおける「混在」生活
東洋史学研究室	○修士 植林と植民:フランス領アルジェリアにおける外来熱帯植物順化運動 / 宋代における特産信仰をめぐる儒家の立場 ●博士 清末新政期の鴉片政策と中央・省関係―政策評価の問題を中心として
西洋史学研究室	○修士 フランス革命期ドイツにおける帝国国法論者の帝国観―ヘーベルリンとベレルシュ事件 / 第2次世界大戦後のイギリスにおけるレイシズム ●博士 近世アルザスをめぐる権力秩序―神聖ローマ皇帝・フランス王・帝国等族―
考古学研究室	○修士 小樽市忍路土場遺跡出土種実の研究 / ZooMSを用いた遺跡出土アシカ科遺存体の種同定の試み ●博士 北海道における縄文時代の墓と社会
文化人類学研究室	○修士 ジェノサイド後のルワンダにおける二元論を超えた平和の探求 ― キガリ・ガサボ地区の土器コーベラティブの事例を通じて ― さっぽろレインボーブライドのエスノグラフィ・連帯が拡大するプライドノレードと主催団体の今日的課題・ ●博士 観光地を生きる人々―中国・貴州省西江(シジャン)ミャオ寨の観光人類学的研究
芸術学研究室	○修士 嶺南画派と近代日本の画壇との関係―高剣丈と京都画壇を中心に / J.M.W.ターナーの自然観における循環の意識と月の描写 ●博士 狩猟塔・レーデ・ラ・バラダの絵画装飾研究 ―16,17世紀のスペイン宮廷における君主教育と宮廷絵画ディエゴ・ベラスケスとの関連から―
博物館学研究室	○修士 東日本大震災の伝承施設等設置の要因と地域への意義に関する研究―施設整備・運営担当者への聞き取り調査をもとに― 17世紀から19世紀後期におけるアイヌ民族の鯨類獲得方法――文献史料の分析による捕鯨説・奇鯨利用説の再検証 ●博士 利用者の主体性を促す展示に関する研究―都道府県立博物館の常設展示を事例として―
欧米文学研究室	○修士 Act to Live: Performance as the Way of Life in J. D. Salinger's "Uncle Wiggily in Connecticut" Queer Consent in Violent Pornography : Questions Sexual Agreement through Harriet Daimler's Writings ●博士 Questions of Immortality and Inquiring Mind in the Ghost Stories of Henry James and Edith Wharton
日本古典文化論研究室	○修士 三条西家本『和泉式部日記』不審本文考 / 近世前期テキストにおけるサノヲの受容―牛頭天王譚を中心として― ●博士 諏訪明神縁起の研究―諏訪信仰の神話世界―
中国文化論研究室	○修士 『東坡易傳』による蘇軾の性命観の研究 / 死生・情欲・諧謔――明清文学における「馬桶」 ●博士 陶淵明の隠逸詩とその思想
映像・現代文化論研究室	○修士 太宰治作品における「家庭」 / つげ義春マンガにおける内語研究 ●博士 俳優たちの映画―ジョン・カサヴェテス作品における俳優演技の理論と実践
言語科学研究室	○修士 アラビア語シャーム方言における語形変化―動詞の Sam- 接頭辞活用形の意味をめぐって― 「怒り」と「悲しみ」に関する慣用句表現の日中英対照研究 ●博士 アイヌ語否定表現の語用論的研究 ―口承文芸テキストを中心に―
スラブ・ユーラシア学研究室	○修士 ジョージアのLGBTが直面する現状とクィア映画に見られるLGBT表象:政治・宗教・社会的観点からの分析 帝政ロシア民族誌の中のヤクート人: その叙述と認識の変化(18世紀から19世紀半ば) ●博士 北東アジアにおける国際協力を通じた地方振興に関する考察
アイヌ・先住民学研究室	○修士 アイヌ語における証拠性形式の語用論的研究 / 北海道・樺太・アムール河下流域の諸民族の口承文芸に関する比較研究―口承文芸におけるクマを中心に― ●博士 アイヌ文化とアイヌ文化財制度の研究―台湾先住民民族文化財との事例比較―

他の修士・博士論文の研究テーマはウェブサイトにてご覧いただけます。 <https://www.let.hokudai.ac.jp/general/master-doctor-thesis>

哲学宗教学講座

本講座の研究領域は、哲学、倫理学、宗教学、インド哲学の各分野を含みます。伝統的な原典研究から、先端的・理論的な研究、宗教現象の実証的研究、さらに、現代の諸問題に関わる生命・環境倫理学、情報科学や神経科学との学際的研究まで、多様な研究が行われています。人類の連綿たる営為の結晶である哲学や宗教をめぐる様々な考察の吸収・継承・展開のためには、思考力・感性・表現力を不断に磨くことが要求されます。さらに各分野の主要テキストと本格的に取り組むために古典語を含む複数外国語の習得が必要となる領域もあります。



●哲学倫理学研究室



●宗教学インド哲学研究室

歴史学講座

「日本史学研究室」「東洋史学研究室」「西洋史学研究室」「考古学研究室」から構成されています。歴史学は、いまこの世界が成り立っている所以を過去に遡って探究する学問です。また、それと同時に、現代の世界の在り方を相対化するための手がかりを過去に求めようとする学問でもあります。そしてなによりも、史資料を通して過去の人々との「対話」を楽しむ学問です。当講座は、日本はもちろんのこと、世界中の幅広い地域を対象として、このような試みのための場を提供しています。



●日本史学研究室



●東洋史学研究室



●西洋史学研究室



●考古学研究室

文化多様性論講座

この講座では、「文化人類学」、「芸術学」、「博物館学」という性格が異なる3つの学問分野の教員が、〈文化多様性〉と〈フィールドワーク〉という共通項で教育・研究を行います。人類の文化の多様性と共通性を研究する「文化人類学」。古今東西の美術をはじめ、音楽、文芸、演劇などの多様な芸術を対象に研究する「芸術学」。そして、これらの成果を、展示を含めた事業を通して、多様なミュージアムでどのように展開するかを研究する「博物館学」。これらの研究を、机上で文献をひもとくだけでなく、実際にその現場で考えるフィールドワークを通して進めていきます。



●文化人類学研究室



●芸術学研究室



●博物館学研究室

表現文化論講座

欧米文学、日本古典文化論、中国文化論、映像・現代文化論の4研究室によって構成され、文学・思想・映像・大衆文化などを含む幅広い文化を教育・研究の対象とします。英語圏、フランス、西洋古典、スラブ語圏、中国、日本の各地域と言語、および古代から現代までの時代にわたって、人間が表現してきた豊かな作品を、多様な批評理論・映像論・文化理論に基づき、理論的かつ具体的に分析し評価することを主眼とします。言語文化や視覚メディア文化を深く研究したい方を歓迎いたします。



●欧米文学研究室



●日本古典文化論研究室



●中国文化論研究室



●映像・現代文化論研究室

言語科学講座

言語を科学的に捉える視点から、一般言語学と個別言語学について、記述的、理論的、実証的、応用的な研究を行います。国語学、日本語学、英語、フランス語・ロマンス語、ロシア語・スラブ語等のヨーロッパ系言語学、韓国朝鮮語やアイヌ語を中心とするアジア系言語学などの個別言語学のほか、言語学の多様なアプローチでことばを研究しています。歴史言語学や社会言語学、音声・音韻・形態・統語・意味・語用の全般に関して言語現象を広く多層的に学びます。



●言語科学研究室

スラブ・ユーラシア学講座

スラブ・ユーラシア（ロシア・中央ユーラシア・東欧）は、豊かで多様な文化を持ち、現代世界を考察するうえでも欠かせない地域です。本講座は、この地域の研究の世界的拠点であるスラブ・ユーラシア研究センターの教員が担当しています。センターが所蔵する日本最大規模の図書・資料を利用し、センターに滞在する国内外の研究者との交流や、頻繁に開催される国際シンポジウム・研究会から刺激を受けながら、歴史、政治、経済、国際関係、文学・文化、言語、人類学などの諸分野を研究することができます。



●スラブ・ユーラシア学研究室

アイヌ・先住民学講座

世界には70カ国以上におよそ5000の先住民が暮らしています。先住民学は比較的新しい学問領域ですが、先住民を取り巻く文化資源、生活環境、経済社会開発、法制度等々、研究課題は多岐にわたります。研究では、課題に応じて独自の手法が必要であり、多角的な検討が求められます。アイヌ・先住民学講座には、考古学・歴史学・言語学・文化人類学・博物館学・法学の教員が在籍しており、アイヌ民族をはじめとする世界の先住民について学問領域横断的に学ぶことができます。



●アイヌ・先住民学研究室

哲学宗教学講座

哲学倫理学研究室

哲学倫理学研究室では、古代ギリシア以来の西洋哲学・倫理学の原典研究をはじめ、分析哲学・現象学などの現代哲学や日本哲学、論理学やメタ倫理学などの理論的研究、応用倫理学諸分野、神経科学やAI・ロボティクスとの学際的研究など、古今の様々な理論や諸問題に関する研究・教育を行っています。

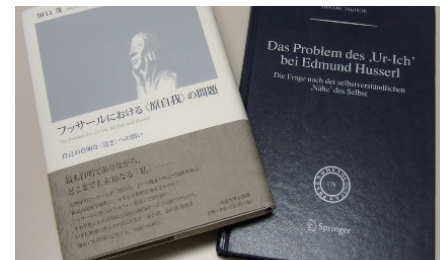
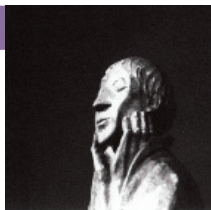
Lab.letters 教員からのメッセージ

田口 茂 教授

TAGUCHI Shigeru

研究内容

E・フッサールの現象学、「意識」をめぐる科学者との共同研究、西田幾多郎・田辺元の哲学。主に自我・自己論、間主観性論、明証 (evidence) 論に取り組んできたが、近年は神経科学・数学・ロボティクス・情報科学の研究者と共同で「意識」の学際的研究に取り組んでいる。



▲田口先生の著書 *Das Problem des 'Ur-Ich' bei Edmund Husserl* (『フッサールにおける〈原自我〉の問題』) は国際的に高く評価され、多数の文献に引用されている。左はその日本語版。



▲アメリカ・ニュージャージー州にあるプリンストン高等研究所。同研究所の Piet Hut 教授 (物理学) との共同研究のため滞在したときに撮影 (2011 年)。右端の時計塔は同研究所のシンボルとして知られている。

「経験」を現象学的に問い直す
哲学と科学の対話を目指して

私は長年「現象学」と呼ばれる哲学的思考を研究してきました。それは、「自明」ゆえに普通気づかれない経験の構造を分析し、それに言葉を与えてゆこうとする学問です。近年、幾つかの幸運な出会いに導かれ、科学者との共同研究が次第に研究の中心を占めるようになってきました。私自身は、長い間特に科学と関係のないところで仕事をしてきたので、自分の仕事が科学者にとって意味があるのかどうか最初は半信半疑でしたが、彼らが求めているのはむしろ彼ら自身がもたない知識であり、その違いにこそ意味があることがわかってきました。それぞれが違う知識や能力をもつからこそ、一緒に働くとき、一人では決してなしえなかったような新しい次元の仕事が可能になるのです。共同研究をしていると、あたかも自分の脳の他に、もう一つ(ないし二つ、三つ…)の脳を外部にもつかのように感じる時があります。そういう瞬間は大変スリリングです。

「意識」「自己」「自由」とは何か?
異分野融合が新しい知を産み出す

神経科学、情報科学、AI (機械学習) やロボティクスの研究は近年大きな進展を遂げ、その中で「意識」「自己」「自由意志」「価値認識」「規範性」といった哲学的テーマが議論されるようになってきています。哲学者も、科学者たちがぶつかっている問題に対して、哲学者として何が言えるのかを問われています。そこで問題に取り組むための考え方やその背後にある前提に関して、哲学者が言えることはたくさんあるように思います。私はたまたま人との出会いに導かれてこのような研究に携わるようになりましたが、もっと多くの哲学者研究者が、科学者との共同研究に加わるようになったら面白いと思っています。ノーベル化学賞を受賞した田中耕一氏は、「異分野融合の場を生かせば、凡才や素人でもイノベーションや独創を生み出すことができる」と言っていますが、至言だと思います。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

哲学宗教学講座

宗教学インド哲学研究室

宗教学インド哲学研究室は、宗教学・宗教史学、死生学、仏教学、インド哲学などを研究分野とする教員によって構成されており、所属する大学院生は、関連領域の研究職や深い専門知識を必要とする一般職への就職をめざし、上記分野に関連したテーマについて研究を深め学位を取得していきます。

Lab.letters 教員からのメッセージ

眞鍋 智裕 准教授

MANABE Tomohiro

研究内容

インド哲学諸学派のうち、アドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派 (不二元論学派) の思想 (史) 研究を行っています。特に、16-18 世紀にみられる不二元論学派の積極的なバクティ思想導入という事象に注目し、8 世紀の不二元論学派誕生から現代スマルタ派に至るまでの不二元論教学史の構築を目指しています。



▲世界遺産にもなっているネパール最大のヒンドゥー教寺院バジュバティナート。バグマティ川はガンジス川に合流している。



▲カトマンズ盆地に写本調査に行った時の古都バタンでの一枚。実際に写本を見せてもらえるかどうかは現地に行ってみないとわからないことも多い。

人生の天秤がつねに傾く
インド哲学の吸引力

インド哲学や仏教研究は、皆さんが「知っている」と思う領域や理解を軽く超えたところにその魅力が広がっています。「梵我一如とはアートマンとブラフマンが“同じ”であること」と習っても、実際のところは頭の中が疑問符で一杯になって当たり前。サンスクリット語で「一」を意味するエーカを「同じ」と訳しても、その「同じ」は「同一」か、それとも「同質」の意味なのかで学派が分かれるほどの議論が続いています。私自身、中学のときから惹かれていたバクティ思想研究の道に進み、途中幾度も人生の帰路がありましたが、研究と他のものを天秤にかけたときにいつもこちらに天秤が傾く、それくらいの面白い世界があるということを皆さんに伝えていきたいです。

眠る写本も徐々にデジタル化
「読みたい」関心を大切に

現在の研究テーマであるアドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派は複雑多岐なインド哲学史の中でも“保守派の中の革新派”のような位置づけにありますが、私が大学院時代には仏教論理学も修めており、皆さんが「これを読みたい!」と思うテキストがあれば、喜んで歓迎します。北海道大学は宗教学や仏教学など幅広い分野の研究者が席を連ねており、隣接分野に触発されることもきっとプラスにはたらくはず。また、国内のインド哲学研究界は次代の成長を願って横の交流を大切にしているため、他大学との情報共有も可能です。近年はインド各地に眠る写本のデジタルアーカイブ化も進んでいます。インド哲学研究はこれからが本番。皆さんの力で拓いていける学問です。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

佐野 勝彦 教授 SANO Katsuhiko

■研究分野
西洋近現代哲学 (特に現象学)、
論理学 (特に非古典論理、哲学的論理学)

田口 茂 教授 TAGUCHI Shigeru

■研究分野
西洋近現代哲学 (特に現象学)、
意識の学際的研究、日本哲学

村松 正隆 教授 MURAMATSU Masataka

■研究分野
近現代フランス哲学、近現代倫理学

奥野 満里子 准教授 OKUNO Mariko

■研究分野
現代英米倫理学、道徳哲学、応用倫理学

宮園 健吾 准教授 MIYAZONO Kengo

■研究分野
心の哲学、心理学の哲学、精神医学の哲学、
美学、認識論、近世哲学

野村 恭史 助教 NOMURA Yasushi

■研究分野
現代分析哲学 (特にウィットゲンシュタインの哲学)

教員紹介

林寺 正俊 教授 HAYASHIDERA Shoshun

■研究分野
仏教学、仏教思想史

宮嶋 俊一 教授 MIYAJIMA Shunichi

■研究分野
宗教学、死生学

眞鍋 智裕 准教授 MANABE Tomohiro

■研究分野
インド哲学、インド哲学史

歴史学講座

日本史学研究室

日本史学研究室は、古代・中世・近世・近現代に関する、日本列島および中国大陆・朝鮮半島・北方地域を視野に入れた実証的研究が特徴です。これまで、実に多くの研究者が輩出してきました。学内には日本史分野の専門書が揃い、史料（北方史の基本史料および各時代・各分野の刊本資料・復刻版等）も豊富に集積しており、研究環境に恵まれています。

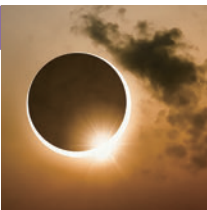
Lab.letters 教員からのメッセージ

吉田 拓矢 講師

YOSHIDA Takuya

研究内容

おもに飛鳥時代から平安時代にかけての、暦法や天文について研究しています。



▲日月食の計算法などを記した、賀茂氏の秘本『暦家秘道私記（宣明暦注定付之事）』（国立天文台ホームページより引用）。



▲奈良国立博物館「正倉院展」を見学するため毎年、奈良を訪問。画像は復元された平城宮大極殿（吉田講師撮影）。

暦に身を委ねた人々の心を
読み解く現代の暦博士に

日本古代には中国伝来の暦法に掲載されていた数式を計算して本邦の暦を作る暦博士という技術職が存在しました。その計算法を知る者だけが作ることができた当時の暦は、日食のような科学的な天文現象を予測するだけでなく、来月は何日までであるのかという基本情報や日々の吉凶を示す占いを含めて様々なことが記載されており、人々の生活を規定する非常に重要なものでした。千年前の貴族も、来週の空模様が気になる現代の私たちも、天空を見上げる行為は同じであり、もしかすると同じ悩みや同じ喜びを抱えていたのかもしれない。そうした暦に身を委ねた人々の心の機微を、暦博士さながらに史料とデータから読み取る暦算研究に没頭しています。

古代史の「なぜ?」は
解明されるのを待っている

暦博士の中には代々その任を世襲した賀茂氏がおり、古来からの予測技術や専門知識を次の世代へ守り伝えてきましたが、賀茂氏の断絶とともに長年蓄積された技術や知識の一部が失われてゆきました。天文暦算史に限らず、日本の古代史もこのまま研究者人口が先細りになると、実はまだ開拓の余地があった古代史の疑問や矛盾も解明されないままに。これから史料を何度でも丹念に読み解いていけば、きっとあなたでなければ気づくことができない研究テーマが見えてきます。その日を迎えるためにも、教員との距離が近く、研究に集中できる北海道大学で共に史料と向き合ってみませんか。少人数制を活かして、実践的な研究計画を考えるサポート体制も万全です。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

川口 暁弘 教授 KAWAGUCHI Akihiro

■研究分野
日本近代史、明治憲法史

権 錫永 教授 KWEON Seok-Yeong

■研究分野
日本近代思想史、植民地期朝鮮文化史

谷本 晃久 教授 TANIMOTO Akihisa

■研究分野
日本近世史、北海道地域史

橋本 雄 教授 HASHIMOTO Yu

■研究分野
日本中世史、東アジア海域史

吉田 拓矢 講師 YOSHIDA Takuya

■研究分野
日本古代史、天文暦算史

歴史学講座

東洋史学研究室

東洋史学研究室では、漢文・現代中国語・ペルシア語・アラビア語・トルコ系諸語等多様な言語で書かれた史料を読むことで、広く東洋諸地域を対象に歴史研究を行っています。

Lab.letters 教員からのメッセージ

末森 晴賀 講師

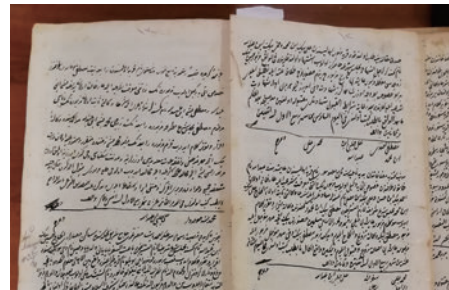
SUEMORI Haruka

研究内容

オスマン朝ーヨーロッパ間の「海賊」に関する取り決めや実際の「海賊」対応から、前近代オスマン朝の海上秩序を明らかにしています。また、「海賊」に攫われたムスリム捕虜の回想録や、20世紀初頭に至るまでオスマン朝社会で行われた「魔法」についても関心があります。



▲トルコのティレにある19世紀前半に建てられたネジブ・ハバシャ図書館。貴重な史料の現物を見ることでデジタルデータからは得られない発見に出会うことも。



▲オスマン語はトルコ語の文法に、ペルシア語やアラビア語の語彙が豊富に含まれている。史料言語の習得と読解の訓練は研究の基礎中の基礎。ゼミでの学びが活かせる。

地中海をめぐる
前近代オスマン朝の対外関係

オスマン朝は、13世紀の終わりごろから20世紀初頭までの約600年間、中東やヨーロッパ、アフリカにまたがる広大な地域を統治した王朝です。モーツァルトの「トルコ行進曲」等にもその足跡が見られるように、近世・近代の世界史上重要な位置を占めた帝国であり、今日でも中東や東欧一帯にはその痕跡が残っています。オスマン朝は諸外国と戦争を行う一方、友好国やその住民に対しては条約に基づき安全を保障していました。それでは、海上で友好国の人間に危害を加えたり、あるいは彼らから攻撃を受けた場合はどうなるでしょうか。関係する条約の規定や、各事例における規定の適用を分析して、オスマン朝の海上秩序を明らかにすることを目指しています。

史料がもたらす「裏切り」が
歴史学研究的な楽しみに

私の場合、初めからオスマン朝の海上秩序を研究しようと決めていたわけではありません。トルコ留学時代に現地の文書館や図書館で幅広く史料収集を行い、ジャンルを問わず読み進めていく中でこのテーマに出会うことができました。帰国間近に入手したムスリム捕虜の「冒険譚」は、マルタ騎士団に攫われたオスマン官人の回想録ですが、文書史料からは見えにくい捕虜個人の視点を考えるきっかけになりました。

歴史学は史料状況に左右されるので、自分の考えるテーマを研究できるとは限らないという制約がある一方、史料からは思ってもみなかった事実と遭遇することがあります。史料をめぐるたびに「裏切られる」ことが研究の楽しみです。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

佐藤 健太郎 教授 SATO Kentaro

■研究分野
中東イスラーム史（特に西地中海地域）

吉開 将人 教授 YOSHIKAI Masato

■研究分野
中国近現代史、南中国、民族問題、学術史

末森 晴賀 講師 SUEMORI Haruka

■研究分野
オスマン朝・トルコを中心とする西アジア史

歴史学講座 西洋史学研究室

西洋史学研究室では、中近世から近現代へといったヨーロッパとアメリカの歴史を対象として、政治史、経済史、社会史、文化史などのアプローチによって研究をおこなっています。また最近では、ジェンダーやナショナリズム、植民地主義や移民といった新しいテーマにも取り組んでいます。

Lab.letters 教員からのメッセージ

安酸 香織 准教授

YASUKATA Kaori

研究内容

中世後期・近世ヨーロッパにおける政治秩序の研究。主たるフィールドはアルザスとライン上流域。



▲16世紀初めのライン上流域の地図（出典：Martin Waldseemüller, Tabula Nova Particularis Provincie Rheni Superioris, Straßburg 1513, Bibliographic Metadata, Landesbibliothekszentrum Rheinland-Pfalz, <https://www.dilibr.de/rib/content/titleinfo/128034>。）



▲アルザスの中心都市ストラスブールの街並み。ライン川支流のイル川の向こうに大聖堂が見える（安酸准教授撮影）。

ドイツ・フランス・スイスが交わる 注目の「ライン上流域」

ライン川を挟み、東にドイツを望むフランス北東部のアルザス地域史研究において、近年、ライン川を単に両国の境界線と見るのではなく、両岸を含めた境界域として捉える「ライン上流域」という新しい視角が注目されています。その中でも私は中近世の紛争・係争に焦点を当て、例えば経済的にも重要なライン川の航行に関する権利をめぐり、対立・妥協・調和を繰り返しながら柔軟な紛争解決を図る境界域の秩序を明らかにしようとしています。中近世ドイツ帝国（神聖ローマ帝国）とフランス王国にまたがるアルザス史は、スイス盟約者団を含めるとさらに複雑な様相を呈しますが、その重層的な秩序をフランス語・ドイツ語・ラテン語の史料を用いて少しずつ解きほぐしています。

自分の中に生まれた関心を 問いかけにしてアウトプット

私は学部1年時に山本文彦先生の神聖ローマ帝国史の授業を聞いて歴史学の面白さに魅せられ、現在に至ります。もともと歴史が得意なわけではなかったのですが、だからこそ新鮮な視点で研究を続けてこられたように感じています。歴史学は現在から過去に問いかけ、史料を介して過去との対話を繰り返す学問です。先行研究の内容をインプットするだけでなく、それらを批判的に読み、自分の中に生まれた関心や違和感を学術的な問いかけとしてアウトプットする力が非常に重要です。時には学外の文献・史料にもあたり、膨大なデータを整理していくと「問い」の解像度はさらに上がり、その先に見えてくる自分だけの発見が、大きな喜びとともに皆さんを待っています。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

長谷川 貴彦 教授 HASEGAWA Takahiko

■研究分野
イギリス近現代史、歴史理論

松嶋 明男 教授 MATSUSHIMA Akio

■研究分野
近現代フランス史

村田 勝幸 教授 MURATA Katsuyuki

■研究分野
アメリカ史、アメリカ研究

山本 文彦 教授 YAMAMOTO Fumihiko

■研究分野
ドイツ中世・近世史

飯坂 晃治 准教授 IISAKA Koji

■研究分野
西洋古代史、古代ローマ史

安酸 香織 准教授 YASUKATA Kaori

■研究分野
近世ヨーロッパ史、アルザス地域史

歴史学講座 考古学研究室

人工遺物・遺構・遺跡研究のトップランナーと、最新の考古科学を駆使する動物・植物考古学、文化財科学・年代測定の専門家により教員が構成される考古学研究室。旧石器時代～近現代、ユーラシア大陸・日本列島～アメリカ大陸という幅広い時期・地域をカバーする充実したスタッフが、大学院生の先端的な研究推進を支援します。

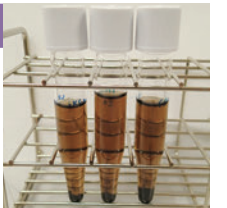
Lab.letters 教員からのメッセージ

國木田 大 准教授

KUNIKITA Dai

研究内容

先史時代における人間活動と環境変動について研究を進めています。特に、年代測定や同位体分析などの自然科学的手法を用いて、過去の食性や文化変遷に関して検討を行っています。



▲発掘された土器に付着した“お焦げ”の採取風景。煮炊きされた内容物を特定し、古代人が何を食べていたかを探る。

フィールドに立つ考古科学者 年代測定で遺物の情報を開示

学部2年の時に初めてロシア・沿海地方の発掘調査に参加し、以来毎年、夏場は調査メンバーの一員としてフィールドで過ごしています。一般に分析調査を専門とする考古科学者はラボワークを好む傾向にありますが、フィールドワークの魅力も知る同業者は国内でそう多くはありません。発掘現場で吸収することは多岐に渡り、サンプリング資料とともにその場を取り巻いていたワクワクするような空気感ごと持ち帰ったあとのラボワークにも、いっそう力が入ります。

発掘された遺物から読み取りたい最も重要な情報は、年代です。それがいつのものがかわかれば、秘密のパスワードを開いたようなもの。その先にあるさまざまな情報を知る突破口になります。



▲日露共同調査で行われた極東ロシア・マラヤガバニ遺跡での調査風景。どのフィールドも移動の段階でひと苦労する覚悟は必要。

多様性に満ちた北大考古学研究 考古調査士の輩出も始まります

北海道大学の考古学研究室は北方文化論講座を前身とする歴史があり、考古学のなかでも幅広い研究分野を網羅している教員の充実度は国内屈指だと思います。大学関連施設である北大総合博物館や北大埋蔵文化財調査センターとの連携や、長年培ってきた研究実績・国内外の豊富な人脈が、あとに続く皆さんの研究を力強く後押ししてくれます。

考古調査士資格制度への加盟も、北大が国立大学の第二号です。2018年の文化財保護法改正によりいまは文化財の保存だけでなく観光資源としての活用を考える時代になりました。国民共有の財産である文化財に関する最新情報や正しい専門知識を身につけておくことが就職後のソフトランディングにもなるでしょう。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

江田 真毅 教授 EDA Masaki

■研究分野
動物考古学、考古鳥類学、文化財科学

高瀬 克範 教授 TAKASE Katsunori

■研究分野
考古学、植物考古学、歴史生態学

國木田 大 准教授 KUNIKITA Dai

■研究分野
考古学、文化財科学

中澤 祐一 准教授 NAKAZAWA Yuichi

■研究分野
考古学、人類進化史

夏木 大吾 准教授 NATSUKI Daigo

■研究分野
考古学、先史考古学、地考古学

文化多様性論講座 文化人類学研究室

この地球上で人類はそれぞれの自然環境に応じて、多様な文化を育んできました。文化人類学とは、自然と結びついた文化の多様性を、研究者が実際に現場に身をおきながら明らかにする分野です。私たちの慣れ親しんだ世界の外に出て、人類の多様な可能性を知り、これからの地球社会を構想する、そんな自由で創造的な場が文化人類学研究室です。

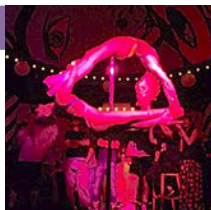
Lab.letters 教員からのメッセージ

ケイトリン・コーカー 准教授

Caitlin COKER

研究内容

人類学をしている。それは、特定の場所で特定の人々と共に過ごして彼らの生活と世界に没頭することで、生きるということを深く考察する。実践の経験を持って創造的かつ哲学的ノンフィクションを編み出す研究。



▲今貂さんが主宰する「倚羅座」の舞台に参加。右端が本人。トップの画像は京都のクラブでIzumi Amazonessさん(下を担当)と2人でポールダンスを披露したときのもの。

暗黒舞踏、ポールダンス・・・ 文化人類学で見る舞踏の世界

ひじかた たつみ

1960年代に土方巽が立ち上げた「暗黒舞踏」。その現役の踊り手たちの合宿に参加したことです。土方巽の孫弟子にあたる踊り手が、目が見えないと信じて踊っているのを見ているうちに、私自身の視界も白くなっていく感じがして、空間が変容しました。土方の弟子である故・和栗由紀夫さんは「踊ることは鑑賞者をmake them fall in love with you(恋させちゃう)こと」とも話しており、文化人類学的な視点で暗黒舞踏を研究する私の“もっとも暗黒舞踏らしい”経験だったと記憶しています。こうした踊り手と観客同士等が共に響き合うことで生まれる現象「アフエクト」について参与観察するところに、自分の研究のオリジナリティーを見出しています。



▲土方の弟子たちが企画するワークショップに参加しながら通訳でサポート。奥の黒い服の男性が和栗由紀夫さん。

知ってほしい身体表現の魅力 生成変化の共同研究もスタート

2020年4月に着任した北海道大学で新しくやってみたかったことの一つに、舞踏初心者者の学生たちを対象にした身体表現を取り入れた授業というアイデアがあります。身体を動かして感じることで世界の見え方や問題に対する向き合い方がどう変化していくのかを、皆さんと一緒に探ってきたいです。私自身が幼い頃から踊り続けてきたこともあって、踊りを研究対象にしていますが、それ以外のさまざまな身体表現にも関心を持つ皆さんを広く歓迎しています。

山口末花子教授を代表とする共同研究《「描かれた動物」の人類学》では、ジェンダーに関するワークショップや身体表現のパフォーマンスを行いました。研究手法や教育手法、発表媒体としてもダンスを取り入れており、ポールダンスや舞踏のパフォーマンスを様々な場所で実施しています。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

小田 博志 教授 ODA Hiroshi

■研究分野
人類学、自発性研究、生命論、平和研究、エスノグラフィー論

山口 末花子 教授 YAMAGUCHI Mikako

■研究分野
人類学、ユーコンの自然誌、西表島のイノシシ猟、狩猟実践、動物をえがく

ケイトリン・コーカー 准教授 Caitlin COKER

■研究分野
人類学、身体論、パフォーマンス研究、暗黒舞踏、ポールダンス

田中 佑実 助教 TANAKA Yumi

■研究分野
人類学、フォークロア、美術、芸術、北欧先住民研究

文化多様性論講座 芸術学研究室

芸術学研究室には、美学・美術批評史・西洋美術史・現代美術史を専門とする教員がおり、人間の文化的な営みの精華である多様な芸術作品やその美的経験などを考察の対象として、理論的普遍的哲学的な方法と実証的個別的歴史的な方法とを相携えながら、芸術を巡る総合的な知の構築を目指して研究しています。

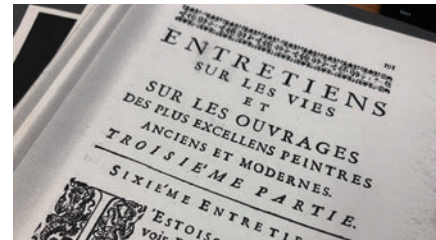
Lab.letters 教員からのメッセージ

今村 信隆 准教授

IMAMURA Nobutaka

研究内容

17世紀フランスの絵画理論と絵画談義の研究、美術館における声と公共性の研究、日本の鑑賞教育史の研究。



▲17世紀フランスの会話篇形式による絵画論。活版印刷の書体が愛らしく、時おりスペルの間違いが見つかるなど「読みたくなる」親近感に溢れている。

17世紀仏と21世紀の日本、 芸術鑑賞でつながる美学の道

17世紀のフランスでは若手の美術家や愛好家が集い、王立絵画彫刻アカデミーを設立。皆で作品を鑑賞し、美術談義を交わす場が生まれました。残された記録からは口頭で交わされた議論がエクリチュール(書かれたもの)として定着していく美術批評黎明期の過程を読み取ることができます。他方、近代的なミュージアムでの鑑賞体験は、他者と距離を置く内省的な鑑賞姿勢(「お静かに!」)が主流になってきました。私の関心は鑑賞場面のこうした多様さにあります。静かで孤独な鑑賞方法にも、17世紀フランスで実現していたような誰かと一緒にその場で語り合っていくという鑑賞方法にも、それぞれに可能性があるのではないかと考え、美学・芸術学・博物館学を横断的に研究しています。



▲1年生対象の授業で作成した冊子『Museum as X』。「たとえるならば、ミュージアムとは」という問いかけに対し、学生からは「カメレオン」「夜の公園」「原っぱ」などユニークな回答が寄せられた。

語り合い、学び合う 共に学ぶ芸術の楽しみ

「芸術とは何か」という大きな問題に真正面から向き合うことは、もはや困難だと言われている。人類が拓いてきた芸術の仕事は、いまや、一望することができないほど広大な大地のようにひろがり、一人の研究者が安易に踏破を目指すことすら許さないほどです。しかし、幸いにして私たちは、必ずしもひとり孤独に、芸術と向き合うわけではありません。もちろん、研究には孤独な局面がつきまとうでしょう。作品を味わうときに、自らの感性に問いかけるときに、思索の過程を言葉でたどっていくときに。しかしその探求の時間が、別の誰かの探求の時間と交わることの幸いも、私たちは知っているはずです。大学で芸術学を学ぶことの意義はここにあると思います。それは、各人にとって大事な課題を持ち寄り、真剣に、しかし楽しく語り合うかけがえのない時間になるはずです。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

浅沼 敬子 教授 ASANUMA Keiko

■研究分野
現代美術史

谷古宇 尚 教授 YAKOU Hisashi

■研究分野
西洋美術史(イタリア美術史)

今村 信隆 准教授 IMAMURA Nobutaka

■研究分野
美学、美術批評史、博物館学

文化多様性論講座 博物館学研究室

博物館学研究室では、今日的なミュージアム・ミッションに対応した新しい価値のあり方や創造について、資料・作品・標本に関する調査研究の方法論に基づきながら、フィールドワークを通して考察していきます。博物館学的なアプローチの可能性を探りつつ、学芸員養成課程での基礎的な知識のバージョンアップを目指します。

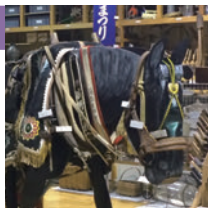
Lab.letters 教員からのメッセージ

卓彦伶 講師

CHO Yenling

研究内容

- ・博物館の地域連携活動のあり方とその社会的効果の検証
- ・小規模博物館における市民主体運営のあり方
- ・博物館の社会的役割



▲毎年9月に開催される兵庫県伊丹市の「鳴く虫と郷町」。市民の「キリギリスハンター」が事前にハントした幼虫を伊丹市昆虫館が飼育し、イベント中に皆で鳴き声を楽しむなど市民参加型の活動が多い。



▲北海道士別市の朝日郷土資料室のボランティア組織は80代90代が元気に活動中。林業で盛だったまちの歴史を伝える道具や民具を使い方とともに記録・保存している。

地域活性やまちの記憶の保管庫に ミュージアムが持つ多彩な“顔”

私が大学院時代にフィールドワークで通っていた伊丹市では、地元の昆虫館を中心に、市内の文化施設、市民、商店会が連携して、2006年から「鳴く虫と郷町」という事業に取り組んでいます。この事業が地域社会にどのような社会的効果をもたらしているのかを、ロジックモデルを用いて分析する試みが行われていました。一方、北海道士別市朝日郷土資料室では、ボランティア組織への聞き取り調査を通じて、「自分たちのまちの記憶を残したい」という思いと、それを形にしていくアーカイブ活動のプロセスを記録する取り組みも続けています。

このように、地域ごとに異なる使命や役割を担うミュージアムや関係者へのインタビューを重ねる中で、「人々の記憶や思いを受けとめ、大切にできる場所」となりつつあるミュージアムへの解像度をさらに深めています。

フィールドに選んだ以上、 その土地に対して責任がある

北海道は開拓移民によってまちが発展していったため、ミュージアムにその土地柄が色濃く反映されていると予測されます。それぞれの個性を大切にしながら、北海道ならではのミュージアムのあり方を一緒に探っていきませんか。

博物館学の佐々木亨先生のご指導を受けた私がひとときわ鮮明に覚えているのは、「フィールドに選んだ以上、研究者はその地域に対して責任がある。自分たちの論文を書き上げることでその責任を果たすしかない」という教えです。私のようなミュージアムと地域連携をテーマにしている研究者にとっては、ことさらに響く教えであり、この言葉とフィールドワークの大切さを、これから出会う学生の皆さんに繋げていきたいと思っています。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

小山 亮 准教授 KOYAMA Ryo

■研究分野
日本近現代史、博物館学

久井 貴世 准教授 HISAI Aisuyo

■研究分野
動物に関する歴史と文化、歴史鳥類学、博物館学

卓彦伶 講師 CHO Yenling

■研究分野
博物館学

表現文化論講座 欧米文学研究室

欧米文学研究室では、ヨーロッパや英語圏の文学を堪能します。英語圏文学・フランス文学・ロシア及びスラブ文学・西洋古典文学などの伝統的研究を縦系に例えると、横系は文献学・文化歴史表象・比較文学・文学理論などの横断的手法。多様な糸で紡がれた文学の絨毯に乗り、想像と創造の世界に旅立ちましょう。

Lab.letters 教員からのメッセージ

竹内 康浩 教授

TAKEUCHI Yasuhiro

研究内容

19・20世紀のアメリカ文学における散文作品。



▲「文学探偵」とも呼ばれる竹内教授。「謎とき」シリーズの3冊目となる最新刊は、エドガー・アラン・ポーをとりあげた。

小説は自己を映し出す鏡 西洋文学、受容から発信の時代へ

マーク・トウェイン、フィッツジェラルド、サリンジャー等の作品を読んで、みなさんはどこにひっかかりを感じたり、何に共感したりしますか。小説を読んでいると、最初は作中人物の心情や筋の展開に心を奪われていたのに、気づくと物語の中に読み手である自分の姿を見出してしまうことがあります。鏡を見るのと似た感じです。

今、国内の西洋文学研究は変わりつつあります。英米での先行研究を受容する時期を経て、現在は日本人研究者も自説を海外の学術研究誌や学会で発表する発信の時代。そうした場面でも、根底には作品を通じて「自分とは何か」という問いかけに正面から向き合う真摯な姿勢があるべきだと思います。



▲竹内教授の研究作品「ライ麦畑でつかまえて」の舞台にもなったニューヨーク・セントラルパーク（撮影：竹内教授）

安易な思考の近道を選ばない すべての答えは目の前にある

文学研究の落とし穴は“ファースト・フード的思想”です。手取り早く答えを知りたくて、他人の説を寄せ集めて体裁を整えてしまう。みなさんには思考の近道を選ばずに、一つ一つの議論に納得しながら前に進んでもらいたい。

思えば小説とは単純なもので、ページの上に全てが書いてある。しかし、不思議なことに読み手によって見ているものが全然違う。これは映画も同じで、スクリーンに映っている全てを私たちは見ているでしょうか。この講座での学びを通じてぜひ曇りの少ない視野を手に入れ、不確かな情報が行き交う社会に出てからも大いに活用してほしいものです。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

小椋 彩 教授 OGURA Hikaru

■研究分野
ロシア文学、ポーランド文学、比較文学

竹内 修一 教授 TAKEUCHI Shuichi

■研究分野
フランス現代文学

竹内 康浩 教授 TAKEUCHI Yasuhiro

■研究分野
英米文学

戸田 聡 教授 TODA Satoshi

■研究分野
古典文献学（特に古代ギリシア語文献学）、古代キリスト教史

宮下 弥生 助教 MIYASHITA Yayoi

■研究分野
Shakespeare劇、物語理論、中世英語英文学

表現文化論講座

日本古典文化論研究室

日本古典文化論研究室は、日本古典文学・日本古典文化に関する学問を行う研究室です。『源氏物語』に代表される古代から、近松・西鶴・芭蕉等が人気の近世まで、各自の好みに合致した研究を万全の体制でサポートします。

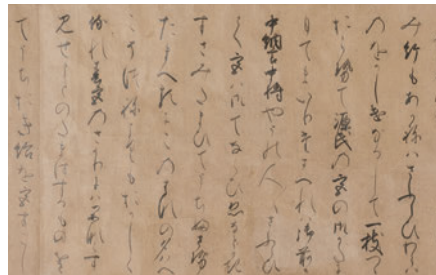
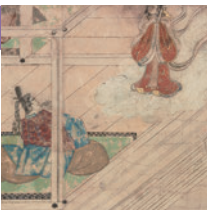
Lab.letters 教員からのメッセージ

小林 理正 講師

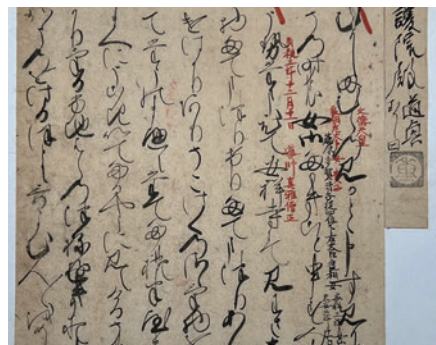
KOBAYASHI Tadamasa

研究内容

享受史上、平安時代の文学作品に発生した無数のヴァリエーションは、どのように説明でき、いかに読み解くことができるのか。こうした問題意識のもと、中古文学作品のさまざまな相貌を分析・吟味・読解しています。



▲鎌倉時代に制作された狭衣物語の絵巻物（模本）。物語の冒頭や話が大きく動く場面になるほど本文に違いが現われやすい。出典：国立文化財機構所蔵品統合検索システム



▲聖護院道興筆「伊勢物語」断簡（架蔵）。古典籍には無数の情報が宿る。しかし、それらは活字化される際、除かれてしまうことがある。

本文の揺れを追いかけて
AIにはできない分析を行う

『源氏物語』や『狭衣物語』などの本文は決して一つではありません。時代ごとに作品を書き写した先人たちがおり、写本ごとに人の手によるものならではの多様な揺れがそこには見受けられます。同じ場面でも一文字写し違ったことで動作主が変わり、それに連なる解釈も異なったまま後世に伝えられることもあります。

写本Aと写本Bの単純比較はAIにもできます。しかし、我々研究者の本領はそこからどういう解釈が生まれ、どのように後世に流れ着いていったのか、変化の系統を見定めるところにあります。実直に自分の目で読み解き、蜘蛛の巣がかかっていると思われがちな本文史に現代の光を注ぐ。令和を生きる私たちもまだまだ発掘しがいのある研究分野です。

原資料に立ち戻り
伝言ゲームから脱却

活字になっている文献や論文を引用する。大学ではおなじみの研究手法ですが、私がこの分野に身を置く学生に常々伝えているのは、活字の向こう側にある原資料に立ち戻ってほしいということです。他者が唱える理解や学説にそのまま安住するのではなく、自分の頭と五感で考える姿勢を大切にしてほしいとも伝えています。その行為が習慣となれば、「思考力」と「読解力」という作品分析に必要な力も自ずと備わってきます。

私の研究室を訪ねてくれた皆さんは、日は浅くとも研究者の卵です。今こそ、他者の言説に左右される“伝言ゲーム”から抜け出すとき。私も皆さんとともに学びながら、若き研究者の飛躍を見届けたいと願っています。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

野本 東生 准教授 NOMOTO Tosei

■研究分野
中世文学

南 陽子 准教授 MINAMI Yoko

■研究分野
近世文学

小林 理正 講師 KOBAYASHI Tadamasa

■研究分野
中古文学

表現文化論講座

中国文化論研究室

中国文化論研究室では、中国の思想、言語、文学などをはじめ、中国および漢字文化圏に関する幅広いテーマを学習・研究することができます。多くの学生は、中国・台湾への短期・長期の留学を体験しています。また本研究室には、中国からの留学生も多く、相互に生の異文化に触れあい、学びあうことができます。

Lab.letters 教員からのメッセージ

熊 征 講師

XIONG Zheng

研究内容

1. 中国詩人の哲学思想、とりわけ隠逸思想
2. 中国古典詩歌批評史
3. 明清小説に見えるジェンダー問題



▲与謝蕪村・呉春筆「陶淵明画賛蕪村句貼紙」。「蕪村」の俳号は陶淵明の「帰去来兮辞」という文から取ったもの。出典：公益財団法人阪急文化財団逸翁美術館蔵



▲文学院1階「書香の森」で展示した「連環画」（中国生まれの小さな劇画本）の企画展。皆でアイデアを出し、得意分野を活かしたチームワークで実現した。

時代や国を突き抜けて
心を掴む「個人の生」讃歌

政治情勢が不安定だった中国の六朝時代、国や社会のために生きる儒家思想の信仰が崩れたため、世俗を離れ、ひたすら自分自身と向き合う隠逸の道を歩んだ人は多くいました。その一人であり、田園での日常生活や心の葛藤や欲望をうたった陶淵明は「古今隠逸詩人の宗」と評されます。

陶淵明の生き方に根拠を与えた思想家として、戦国時代の思想家楊朱があげられます。天下国家が優先される時代に徹底した個人主義を唱えた楊朱が説いた「個人の生の充実」は時を経て陶淵明の心を掴み、その陶淵明の作品が世情に翻弄される李白や杜甫、白居易などの詩人、さらには日本の文化人たちの心をも捉えました。その影響力に、素晴らしい詩や思想というものの普遍性を感じています。

専門分野を楽しく、
わかりやすく分かち合う

選り抜かれた言葉が凝縮している詩の読解は、過去という時間が凝縮されて今この瞬間を迎えている「私」や「あなた」を理解することとも重なります。そう思うと、人も一篇の詩もそこに潜む多様性を理解するのは等しく難しく、またそこが面白いのではないかと感じています。

私が学生としても在籍した本学の中国文化論研究室の輪は、一人一人が独立した「私」の集まりであり、日頃から自由に議論できる刺激的な「私たち」でもありました。学生と同じ目線を大事にしてくれる先生たちから専門研究を楽しく、かつ、わかりやすく他者と共有する喜びも教えていただきました。ここで私が受け取った数々の学びを、皆さんとも分かち合っていきたいです。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

近藤 浩之 教授 KONDO Hiroyuki

■研究分野
中国古代思想、易学思想史

田村 容子 教授 TAMURA Yoko

■研究分野
中国演劇、中国文学

吉田 勉 准教授 YOSHIDA Tsutomu

■研究分野
中国思想史、清代の学術

熊 征 講師 XIONG Zheng

■研究分野
中国古典文学、中国哲学

表現文化論講座

映像・現代文化論研究室

映像・現代文化論研究室では、日本の近代・現代の文学全般、日本および世界の映画を中心として、広く現代の表象文化（アニメーション映画・マンガ・写真・サブカルチャーを含む）と思想を理論的・具体的に考究します。文学・映像・思想のいずれについても、現在の理論水準を追究し、現代世界に通用する最先端の研究を目指します。

Lab.letters 教員からのメッセージ

川崎 公平 准教授

KAWASAKI Kohei

研究内容

戦後日本の映画やその周辺領域における恐怖と身体の表象、および個人とシステムとの関係の表象をめぐる研究。



▲修士論文は模図かずおで執筆。ホラーという枠を超えて、その偉大な作品群は真の意味での驚異であり続けている。



▲表現文化研究のアンテナは、専門分野プラスアルファの広がり重要。守備範囲の広さが実績に繋がり、自分に返ってくる実りも大きい。

霊の表現を発展させてきた

「Jホラー」恐怖の思考

現代日本のホラー映画が描いてきた「何か霊のようなものが写ってしまった」あるいは「いないはずのものがそこにいるかもしれない」という恐怖は、観客である私たちの預かり知らないところで息づいている「他者」の存在を実感させ、ひいてはそれを写している映像媒体そのものが怖くなるという二重の恐怖に観客を陥れます。

こうした「Jホラー」独自の恐怖の思考の実践者である黒沢清研究を踏まえ、現在はそこから発展した戦後日本映画分析に取り組もうとしています。川島雄三監督作品を出発点に、「システムや共同体の中で個人が抱えるどうしようもない無力さと生」という大きな視野で、戦後日本映画を捉え直してみたいと考えています。

作品×□□□の掛け合わせで

学術的な考察に変容

映像・映画やポップカルチャーの感想や印象は誰もが自由に言うことができますが、そこから学術的な思考を取り入れた考察へと変容させていく鍵は、「対象作品を何と関わらせていくか」という視点を持つこと。「何」にあたるものは、歴史や哲学など皆さんの関心次第です。その選択肢を広げるためにも日頃からいろんなものに触れることが大切です。

映像分野の研究は対象を「そのまま見る」ことが基盤となります。行間を読んだり、そこない解釈を加えたりせずに、まずは写っているものをそのまま受け取る。容易なことではありませんが、その出発点に立てるよう、私も皆さんと「一緒にやっていく」というのが今は最も有効な方法だと感じています。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

応 雄 教授 YING Xiong

■研究分野
映像表象論

押野 武志 教授 OSHINO Takeshi

■研究分野
日本近代文学、表象文化論

水溜 真由美 教授 MIZUTAMARI Mayumi

■研究分野
近現代日本思想史、ジェンダー研究

川崎 公平 准教授 KAWASAKI Kohei

■研究分野
映像論、日本映画研究

言語科学講座

言語科学研究室

言語科学研究室では、言語の構造と運用に関して一般言語学と個別言語記述の立場から理論的、実証的、応用的な研究を行います。日本語（国語学・日本語学）、英語、フランス語・ロマンス語、ロシア語・スラブ語、韓国朝鮮語、アイヌ語を中心に、関連領域を含む多様な言語研究を高度に展開するための指導体制を整えています。

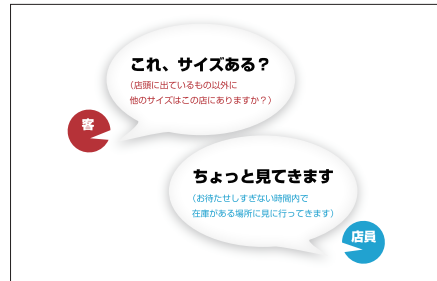
Lab.letters 教員からのメッセージ

加藤 重広 教授

KATO Shigehiro

研究内容

日本語の文法（特に修飾現象、品詞体系、助詞、時制と相、モダリティ等）と語用論（談話標識、世界知識、記憶モデルと文脈、ダイクシス、意味計算）、言語学基礎理論・社会言語学・心理言語学。



▲言外を読み取りあう客と店員の会話一例

「ちょっと=少量」ではない

言外を読み取る日本語の深層へ

客「○○という本はありますか？」店員「ちょっと…」日本語を母語とする者なら、この会話で店員が「ない」と答えようとしていることがわかります。話し手が“言わない部分”を聞き手が自発的に読み取っているからです。我々が発話していることばのやりとりは、あくまでも氷山の一角。互いどう読み取っているのか、そこにどのような規則性や論理性があるのかを明らかにしていくのが、語用論の面白さです。

地方方言が部分的に標準語化して生じる「ネオ方言」や、「りょ」「ねむみ」などSNS発の新しい表現など研究対象は無尽蔵。表立って使われることばを入口に日本語の深層に迫ります。



▲「植えたノニ」の「ノニ」にあたる逆接表現の分布図。東北では「ドモ」、九州では「バッテン」と表現される。

二重敬語は「間違い」か？

自力で考える積極性を養う

よく“言葉の乱れ”として挙げられる「ご試着なさいますか」などの二重敬語は、本当に「間違い」でしょうか。私はその背後に「より丁寧に表現したい」という話し手の意図を感じ、「間違いだ」と決めつけることこそ不適切だと感じています。ことばはつねに“揺れるもの”。必要とされる表現が残り、さらに細かく発展していくものなのです。

豊かな研究生活を送るには、本人の自主性が一番の推進力。もちろん指導教員として学会発表や論文投稿での後方支援も惜しみませんが、本人の積極性に勝るものではありません。言語学の分析を通じて論理的な思考力を磨き、物事を深く理解する力を養っていきましょう。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

李 連珠 教授 LEE Yeonju

■研究分野
言語学、韓国語学、音韻論

加藤 重広 教授 KATO Shigehiro

■研究分野
言語学、日本語学、語用論

野村 益寛 教授 NOMURA Masuhiro

■研究分野
英語学、認知言語学、意味論

藤田 健 教授 FUJITA Takeshi

■研究分野
フランス語学、ロマンス語学、統語論

佐藤 知己 特任教授 SATO Tomomi

■研究分野
言語学、アイヌ語、北方言語

加藤 祥 准教授 KATO Sachi

■研究分野
日本語学、コーパス言語学

菅井 健太 准教授 SUGAI Kenta

■研究分野
ロシア語学、スラブ語学

蔦 清行 准教授 TSUTA Kiyoyuki

■研究分野
国語学、文献学、歴史言語学

スラブ・ユーラシア学講座

スラブ・ユーラシア学研究室

スラブ・ユーラシア学研究室は、ロシア・中央ユーラシア・東欧のさまざまな地域を総合的に研究する地域研究を学ぶ研究室です。研究対象地域の言語と、多彩な分野の専門知識・方法を身につけ、他地域との比較も視野に入れながら、先端的な研究を行うことができます。現地調査や国際学会での報告も奨励・支援しています。

Lab.letters 教員からのメッセージ

服部 倫卓 教授

HATTORI Michitaka

研究内容

ロシア・ウクライナ・ベラルーシを中心とする旧ソ連諸国の経済・政治状況



▲ 今後はロシアが極東シベリアやアジアを重視する「東方シフト」に注目。画像はロシア極東の太平洋への玄関口、ウラジオストクの風景（2018年訪問時に撮影）。



▲ 2024年7月9日、紀伊國屋書店札幌本店で開催された「北大人文学カフェ」でロシア・ウクライナ戦争の現状とこれからの行方について解説した。

イデオロギーにとらわれない
冷徹な地域研究を

1991年に社会主義国のソ連が崩壊し、かつては一枚岩に見えた超大国からウクライナや中央アジア諸国など大小様々な新興独立国が立ち現れてきました。民主主義・市場経済に移行し欧米に接近した国があった一方で、ロシアを含む少なからぬ国が非常に強権的な政治体制へと傾いていき、その結果引きおこされた現在の状況を今、世界が注視しています。

大きな時代の転換点に差し掛かっている今こそ、イデオロギーにとらわれない冷徹な地域研究が必要です。同じ対象地域を見つめながら、文学や歴史など様々な分野の研究者と交流できる北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターで、若い皆さんならではの発想を膨らませてほしいと期待しています。

北海道の酪農家に落ちる影
正しい情報をわかりやすく

ロシア・ウクライナ戦争の影響は、私たちの生活にも確実に暗い影を落としています。その中でも特に北海道では、酪農に必要な不可欠な飼料の価格高騰が、酪農家を廃業へと追いこむ要因の一つになっています。ヨーロッパで起きていることは、私たちの暮らしと決して無関係ではないのです。

有事にはフェイクニュースなどもネット上に飛び交います。今どんなことが起きているのかを正しく皆さんに知っていただけるよう、私も一研究者として自分なりに言葉を尽くして様々な場で発信しようとしています。共編著である『ロシア極東・シベリアを知るための70章』（明石書店）のように一般の方に向けた執筆にも、論文同様の力を注いでいます。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

青島 陽子 教授 AOSHIMA Yoko

■ 研究分野
中東欧・ロシア近現代、ロシア帝国統治構造

岩下 明裕 教授 IWASHITA Akihiro

■ 研究分野
ロシア・CIS外交、境界研究

宇山 智彦 教授 UYAMA Tomohiko

■ 研究分野
中央アジア近代史・現代政治、比較帝国史

仙石 学 教授 SENGOKU Manabu

■ 研究分野
中東欧比較政治、政治経済学、福祉政治

長縄 宣博 教授 NAGANAWA Norihiro

■ 研究分野
旧ソ連地域のイスラーム、ロシア近現代史

野町 素己 教授 NOMACHI Motoki

■ 研究分野
言語学、スラブ言語学

服部 倫卓 教授 HATTORI Michitaka

■ 研究分野
スラブ・ユーラシア経済論

安達 大輔 准教授 ADACHI Daisuke

■ 研究分野
文学、表象・身体・メディア、ロシアの言語文化

諫早 庸一 特任准教授 ISAHAYA Yoichi

■ 研究分野
中央ユーラシア前近代史、
モンゴル帝国史、科学史

大西 富士夫 特任准教授 OHNISHI Fujio

■ 研究分野
国際政治、北極域研究、地域研究

アイヌ・先住民学講座

アイヌ・先住民学研究室

アイヌ・先住民学研究室では、文化資源、生活環境、経済社会開発、法制度等々、先住民族を取り巻く様々な課題について研究できます。考古学・歴史学・言語学・文化人類学・博物館学・法学等の観点からアイヌ・先住民学を体系的に学ぶための指導体制を整えています。

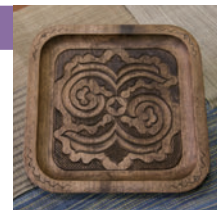
Lab.letters 教員からのメッセージ

蓑島 栄紀 准教授

MINOSHIMA Hideki

研究内容

前近代（とくに古代・中世）のアイヌ史および北東アジア諸民族の歴史。東アジア・東部ユーラシアとの交流を通してみた日本古代史、とくに北方史。「先住民族史」としてのアイヌ史の構想へ向けた取り組み。

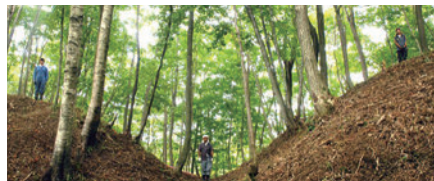


▲ 考古学の調査現場にも積極的に足を運び、多くを学ぶ。画像は2007年に厚真町で発見された15世紀の丸木舟保存作業。

歴史の正しさに一石を投じる
当事者目線のアイヌ史を構想

私の研究の基盤は、文献史料にもとづく古代史研究です。研究フィールドである日本列島の南縁（奄美・沖縄）と北縁（東北・北海道）が倭国・日本や東アジア諸地域とどのような交流を持っていたかを、考古学などの隣接分野にも学びつつ追究し、北海道産のワシ羽や毛皮類などの交易品から人々の足跡を読み取ってきました。

近年は、アイヌ史を研究の新たな柱としています。一般に日本史では、本州が鎌倉時代に突入した13世紀頃に、北海道で「アイヌ文化期」が始まったとされていますが、これではアイヌの歴史と文化の有する長期的な過程がみえないのではないかと懸念が拭えません。日本史の枠組みでアイヌを語るのではなく、もっと幅広い時空でアイヌを主人公にしたアイヌ史を構想したいと考えています。



▲ 画像上は奄美大島、赤木名の「グスク」（城、砦、聖域）の壕。画像下の厚真町桜丘で見つかったアイヌの「チャシ」の壕と比較すると、歴史や文化の共通性と独自性がみえてくる。

最前線の研究環境で
基本的な研究手法を大切に

北海道大学アイヌ・先住民研究センターは文字通り、アイヌと先住民研究のさまざまな分野の専門家が集まる刺激的な空間であり、当事者であるアイヌ民族・先住民族のスタッフと、和人・民族的マジョリティのスタッフとが協同して、異分野間の情報交換が活発です。また、当事者の意見や思いに接したり、当事者が直面している問題を目の当たりにする機会も多く、歴史が現在と地続きのものであると再認識することができます。

こうした学際的な環境だからこそ、皆さんには自分の中で基盤となる基本的な研究手法——文献や史料の森に分け入り、試行錯誤しながら事実に基づいて自説を「実証」する——をしっかりと身につけてほしいと思います。研究で壁に突き当たった時も、多くの場合、基本に立ち返ることが乗り越えるヒントを見つける近道になります。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

加藤 博文 教授 KATO Hirofumi

■ 研究分野
先住民考古学、先住民文化遺産、シベリア人類学

北原 モコットウナシ 教授 KITAHARA Mokottunas

■ 研究分野
アイヌ民族の宗教、アイヌ語、口承文芸

山崎 幸治 教授 YAMASAKI Koji

■ 研究分野
アイヌ物質文化、文化人類学、博物館学

落合 研一 准教授 OCHIAI Ken-ichi

■ 研究分野
先住民法学、憲法学

丹菊 逸治 准教授 TANGIKU Itsuji

■ 研究分野
口承文芸論、アイヌ語、ニヴ語

蓑島 栄紀 准教授 MINOSHIMA Hideki

■ 研究分野
アイヌ史、北東アジア民族史、日本古代史

札幌の空気で深呼吸し 映画の解像度を上げていく

人文学専攻 映像・現代文化論研究室 博士後期課程

三浦 光彦 *MIURA Mitsuhiro*

父親譲りの映画好きを学びの原動力に
ブレッソン作品の謎を追いかけて続ける三浦さん。
自分のペースでコンテンツと向き合える札幌で
新しい映画論を組み立てようとしています。

素人を起用して物語を撮るブレッソン映画を解きほぐす

父が映画好きで、小さい頃から映画は身近なものでした。中学生くらいから監督を基準に映画を選び始め、映画の研究ができる大学を探して北大へ。東京はカルチャーのコンテンツ量が多すぎて、スピードも忙しくない。その点、北海道なら親元を離れて自分のペースでじっくりと映画と向き合えるところにも惹かれました。

僕が学部から研究している監督は、1950～80年代に作品を発表したフランス人監督のロベール・ブレッソンです。彼はプロの役者を使わずに素人を起用し、芝居がかった演技を徹底的に排除した撮影方法で知られています。かと言って作品はドキュメンタリーではなく、あくまでもフィクション、物語を撮っている。それは一体なぜなのか。ブレッソン独自の演技論や身体論が一体どこから来ているのかを読み解こうとしています。

多彩なアプローチを学び説得力と独自性ある論文を

映像・現代文化論研究室には映像表象論を研究されている応先生の他にも映画史や詩歌・サブカルチャーを扱う先生がおられて、映画という題材一つとっても多彩なアプローチの視座を学ぶことができます。研究室の諸先生に「あなたの説は説得力や独自性がある」と認めてもらえる論文が書けるようになれば、その先の学術雑誌への投稿もハードルが下がるというもの。個性豊かな先生たちに日々鍛えられています。

博士課程進学に関する経済面の心配は、生活費と研究費の両方を支援してくれる北海道大学博士人材フェローシップに採用されたことで解消できました。こうした支援制度に加えて学部内にグループ学習室やロッカー付きの博士大学院生専用の自習スペースがある北大は、札幌駅から徒歩圏という立地も魅力。理想的な研究環境が整っていると実感しています。

PROFILE

1998年千葉県生まれ。北海道大学文学部卒業後、大学院に進学。専門はロベール・ブレッソン監督作品研究。カルチャー批評誌「NOBODY」(<https://www.nobodymag.com/>)にパク・チャヌク監督「別れる決心」や小田香監督が札幌で撮影した「Underground」に関する批評も寄稿。2024年4月から日本学術振興会特別研究員DC2に採用。



＼ ここをチェック！ /

入試対策

想定質問を考え、独自性をPR

修士入試の時は映像・現代文化論研究室の先生がたの各専門分野を意識しながら「映画史の先生からは映画史におけるブレッソンの位置づけを聞かれるかもしれない」というように、あらかじめ質問を想定して口述試験に臨みました。博士入試ではより厳密な研究計画を立てると同時に研究の独自性をアピールしました。

研究室には古今東西のアート系映像のDVDが並んでいる。



学部時代から続けてきたブレッソン映画研究の集大成。
博士号取得に向けて、博士論文執筆中。

Research and Study History 〈博士後期課程のあゆみ〉

D1		
4月	北海道大学博士人材フェローシップに採用。	 映画はサブスクリプションでも見えますが名画のソフト、とりわけ監督別のDVDセットとなると高価なものばかり。博士人材フェローシップの支援を使って購入しています。
6月	日本映像学会にて発表。コロナ禍以降初の対面発表。	
11月	表象文化論学会研究発表会にて発表。映像学 vol.109に論文掲載。	
3月	所属研究室が発行する雑誌『層：映像と表現』vol.15に論文掲載。	

D2		
8月	映画監督の小田香監督にインタビューを実施。国際ドストエフスキー協会シンポジウムにて口頭発表。京都大学映画メディア合同研究室第3回シンポジウムにて口頭発表。	 『層：映像と表現』vol.16に「忘れられた記憶、現実の拡張：小田香監督インタビュー」が掲載される。
2月	『映像学』vol.111に論文掲載。	
3月	『層：映像と表現』vol.16に論文掲載。	

D3		
4月	日本学術振興会特別研究員DC2に採用。東浩紀氏へのインタビューが「从数据库动物到观光客 —— 东浩纪访谈（データベース的動物から観光客へ —— 東浩紀インタビュー）」として中国の批評誌『中国图书评论』に掲載。	 『表象』vol.18に「他性的知覚と誤認の能力——映画の分析(不)可能性をめぐる」が掲載される。
6月	表象文化論学会発行の査読誌『表象』vol.18に論文が掲載。	
10月	認知映画学研究者であるコヴァーチ・アンドラーシュ・バリント教授を迎えて北大で開催されたInternational Research Meeting, Cognitive Film Studies: An Introductionにて口頭発表。	 タイトル「International Research Meeting, Cognitive Film Studies: An Introduction」として発表した。
11月	第8回北海道大学映像・現代文化論学会大会にて口頭発表。	
3月	『層：映像と表現』vol.17に映画監督・清原惟へのインタビュー記録および書評掲載。博士論文執筆中。	

修士課程2年次より所属研究室が発行する学術雑誌『層：映像と表現』に毎年研究成果を発表。国際的な場での発表にも力を入れており、中国の批評誌への成果発表をはじめ、国際ドストエフスキー協会シンポジウムや北大で開催された国際シンポジウムで発表するとともに、認知映画学研究者であるコヴァーチ・アンドラーシュ・バリント教授など海外研究者との研究交流も積極的に行っている。博士後期課程での研究生生活は、北海道大学博士人材フェローシップと、3年次に採用された日本学術振興会特別研究員制度という経済基盤に支えられ、思う存分研究に集中することができた。

国際的な人間科学研究をさらに高みへ

Division of
Human Sciences

人間科学専攻

人間と社会に関する
総合的な学びに
科学的にアプローチ。実験、実習、フィールドワーク等、
多彩な研究手法でアプローチ

■ 主な講義題目

心理学研究室	■ 認知行動科学の問題と方法 ■ 感覚・知覚研究 ■ 認知神経科学の問題と方法 ■ 認知行動科学の問題と方法
行動科学研究室	■ 現代社会心理学の動向 ■ 環境社会心理学 ■ 行動科学における実験調査分析 ■ 数理モデルの理論と方法 ■ 社会心理学 ■ 集団力学の理論
社会学研究室	■ 社会学論文の構成と執筆法の解説 ■ 社会変動の新潮流 ■ 東アジアにおける社会構造 ■ 共生のための福祉社会学の応用 ■ 共生社会学のための応用的計量手法
地域科学研究室	■ 環境と地域の社会学的研究 ■ 地理学と地理空間情報 ■ 地誌学研究 ■ 農村振興論 ■ 野生動物管理研究 ■ 空間・場所論

■ 修士・博士研究テーマ例

心理学研究室	○ 修士 短時間動画の視聴経験におけるピーク・エンドルール 物体の典型色が指示忘却に与える影響 ● 博士 The Characteristics of Attentional Templates for Rejection in Visual Search
行動科学研究室	○ 修士 議論フレームに着目した公共的議論のあり方の検討：福島県外除去土壌問題を題材とした集団討議実験 Does relational mobility lead to social differences in positive and negative reputations? The examination in our daily lives ● 博士 協力及びその文化差の起源を探る—文化的集団淘汰理論に基づく理論・実証的検討—
社会学研究室	○ 修士 双減政策の下における家庭資本と教育戦略の選好—中国合肥市における異なる階層の中学生の保護者を比較して— 中国のトランスジェンダーの家族関係における葛藤 ● 博士 グローバル社会における異民族間の共生と民族宗教のダイナミズム—東アジア社会の華人ネットワークの再編成—
地域科学研究室	○ 修士 在日韓国人大学生の日常生活と民族団体の関係性—民団学生会参加者を事例として— エスボラダ北海道の地域密着型運営に求められる役割と連携のあり方—スポーツ振興に関わる連携先の声に注目して— ● 博士 社会的受容性の高い野生動物保全の課題：インドネシア共和国カリマンタン島焼畑農耕民による 商業的野生動物猟の民族誌的研究

他の修士・博士論文の研究テーマはウェブサイトにてご覧いただけます。 <https://www.let.hokudai.ac.jp/general/master-doctor-thesis>

心理学講座

人や動物の認知活動は如何に行われ、脳はどのように働いているのか？
当講座では、このような認知心理学の問題をテーマとした教育・研究を行っています。具体的には、感覚・知覚、注意、記憶、学習、発達など、長い歴史を持つ分野における心的過程の解明のみならず、脳科学、音楽、魅力など、比較的新しい学際的な分野における現象やそのメカニズムについての理解を進めたり、産業応用にも取り組んだりしています。全教員が連携を取りながら、専門家・研究者の育成を行っています。



●心理学研究室

行動科学講座

社会心理学・進化心理学・文化心理学・行動経済学・神経科学・比較認知科学など人間・社会科学諸領域で生み出された理論と方法を融合させ、「心と社会のマイクロ・マクロ関係」、すなわち人や動物の心とそれを取り巻く社会との相互影響過程に関する先導的研究を進めています。協力行動の適応的・神経科学的基盤、文化の生成と伝達、社会的意思決定、社会構造と心理の関連といった理論研究から、社会問題の解決や公共的意思決定といった実社会対応型まで、幅広い研究を行っています。



●行動科学研究室

社会学講座

社会がどのような構造をもちどう変化しているかを個人との関係から記述し因果的に説明すること、どのような社会を目指すべきかを規範的に構想すること、これらの基礎となるデータを社会調査によって正確に収集し分析できること、を目指しています。そのため大学院生は、各自の関心を中心としながら、社会学の古典的な理論から最新の仮説まで、質的・量的な社会調査法とともに幅広くそして深く学びます。海外の大学への留学を支援するとともに、必要に応じて専門社会調査士資格を取得できる体制を整えています。



●社会学研究室

地域科学講座

地域科学講座では、現代の地域社会が抱える多様な問題について、人間社会と自然環境の両面から総合的に研究を進めています。地域社会学・人文地理学・社会生態学の3分野を中心とした学際的なアプローチによって地域の実践的課題に取り組んでいます。各分野の基礎的理論からフィールドワークの技法、分析の方法、実社会への応用までを、野外実習を交えながらマン・ツー・マンで指導することで、自分で問題を発見し、自分で調べ、解決策を探るという社会で必要とされる能力の養成を目指しています。



●地域科学研究室

心理学講座

心理学研究室

心理学研究室では、感覚・知覚、注意、記憶、学習、発達、脳科学、音楽、魅力などに関するオリジナルな実証研究を各学生が計画・遂行し、その成果を論文として発表できるような研究者や、その過程で身につけた技能を職場で生かせるような人材を育成するための指導体制を整えています。

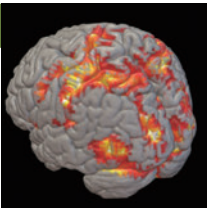
Lab.letters 教員からのメッセージ

小川 健二 教授

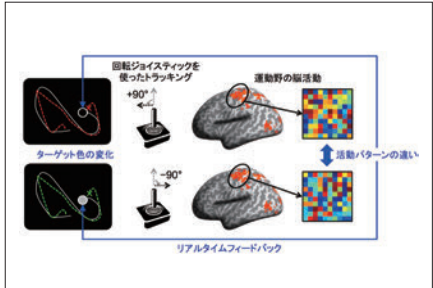
OGAWA Kenji

研究内容

ヒトが巧みな身体運動を学習したり、他者の行為を認識する脳内メカニズムについて、行動実験や機能的核磁気共鳴画像 (fMRI) などの脳機能計測法を使って解明しています。



▲fMRI等の科学技術の進歩にともない認知神経科学の研究は急速に発展している。



▲最新の研究では、「ニューロフィードバック」を使うことで、効果的な運動学習 (例えば複数の回転変換への同時適応) ができる可能性を探っている。

情報科学の手法を駆使して
心を生み出す脳の仕組みを解明

認知神経科学とは、ヒトの心のはたらきを脳の神経活動から説明する学問分野です。この研究室では、心の営みという極めて文系的なテーマに対し、心理物理実験や機能的核磁気共鳴画像法 (fMRI) などの脳機能イメージングに加え、機械学習や多変量解析などの情報科学の手法を用い、脳の仕組みや情報表現の解明に取り組んでいます。現在、特に関心を持っているテーマは運動学習と社会認知。観察した他者の行動を、自分が行っているかのように映し出す「ミラーシステム」や、運動中の脳活動をリアルタイムで本人にフィードバックする「ニューロフィードバック」など、身体性に基づいた認知と脳の関連性を掘り下げていきたいです。

心理学・脳科学のノウハウを吸収
トップアスリートも研究テーマに

北海道大学の心理学講座は心理学と脳科学にまつわる様々な研究ノウハウを持っている先生方が揃い、さらに総合大学の強みとして医学部や各機関との連携といった学部横断的な研究を可能にする土壌を持っています。

他方、心理や脳に関心を寄せる学生の中には“世界でトップクラスのサッカー選手は自分が走っているフィールドを鳥瞰的に見ることができる”という説を脳科学的に検証したい、と自分なりのテーマを設定した学生もいます。まだまだ「わからないことだらけ」の分野ですので研究テーマは自分次第。このサッカー選手の例も私には思いもつかないものでしたので、今後皆さんがどんなテーマを見出すのか非常に楽しみに待っています。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

小川 健二 教授 OGAWA Kenji

■研究分野
認知神経科学 (特に運動学習や社会認知)

河原 純一郎 教授 KAWAHARA Jun-ichiro

■研究分野
認知行動科学 (注意、記憶、魅力、顔、産業応用)

川端 康弘 教授 KAWABATA Yasuhiro

■研究分野
認知心理学 (色覚、感性、知識、熟達)

金子 沙永 准教授 KANEKO Sae

■研究分野
認知心理学 (とくに視覚、錯視)

田辺 弘子 准教授 TANABE Hiroko

■研究分野
認知行動科学 (運動制御、身体表現、スポーツ心理)

鶴見 周摩 助教 TSURUMI Shuma

■研究分野
認知・発達心理学 (乳児の知覚・認知)

森本 琢 助教 MORIMOTO Taku

■研究分野
認知心理学 (クロスモダルな情報処理過程、記憶、心的イメージ)

行動科学講座

行動科学研究室

行動科学研究室は、社会心理学・進化心理学・文化心理学・行動経済学・比較認知科学・神経科学など人間・社会科学諸領域の理論と方法を融合させ、人や動物の心と社会との相互影響過程に関する先導的研究に取り組みます。専門に特化した内容はもちろん、指導教員以外からも深く幅広く学べる教育体制を整えています。

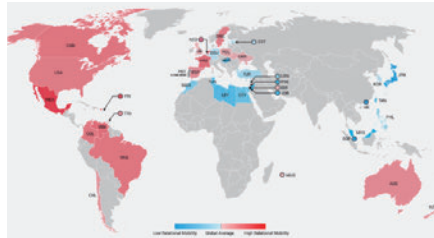
Lab.letters 教員からのメッセージ

結城 雅樹 教授

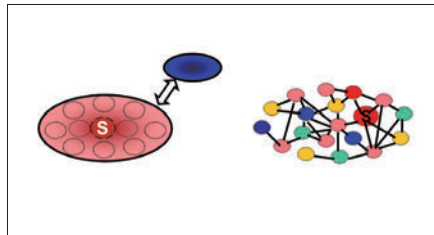
YUKI Masaki

研究内容

社会環境の性質と人間の心理・行動との関連、集団過程の性質の文化差。



▲39カ国比較研究 (Thomson, Yuki, et al., 2018) における関係流動性スコア (赤が強いほど関係流動性が高く、青が強いほど関係流動性が低い)。



▲北米人と東アジア人の集団行動原理の違い (Yuki, 2003)。「S」は自己 (self) を表し、周囲の複数の小さな円は他の内集団メンバーを示す。左側の北米型では「ライバル校とどちらが強い」などの外集団との比較が、右側の東アジア型では集団メンバー同士の関係性が重視される。

心の多様性はどこから生じる？
社会の性質の違いに注目した分析

異なる国、異なる地域、異なる学校や業種などの間で、そこに暮らしている人々の心のあり方がしばしば異なるのはなぜでしょうか。私の研究ラボでは、人の心の多様性が生まれる原因を、それぞれの社会の性質の違いに求める「社会生態心理学」に基づく先端的な研究を進めています。現在特に注目しているのが、関係流動性と呼ばれる社会的な要因の効果です。対人関係を自由に選び替えられる欧米型の社会と、対人関係が固定的なアジア型の社会では、人々の心理はどのように異なってくるのでしょうか (図上)。また、当ラボがこれまでに発見した新たな心の多様性として、集団行動原理の文化差 (図下) や、表情知覚の文化差 (相手の目を見るか口を見るか) などがあります。

国際色豊かな顔ぶれとともに
刺激に満ちた共同研究

研究で国際比較を多用することもあり、私の研究室にはこれまでアメリカやニュージーランド、英国、中国、クロアチアを出身とする大学院生やポスドク研究者など、国際色豊かな顔ぶれが所属してきました。研究に対してはチームで取り組む共同研究のスタイルをとっており、そこから各自が関心を持つ切り口や方法論で自分の研究テーマを掘り下げしていきます。

指導で重要視するのは、国際レベルで競争できる研究者を育てること。正確かつ簡潔に伝えるコミュニケーション能力の育成を大切にしています。行動科学研究室ではラボ間の垣根が低く、全ラボが一同に会する共同ゼミでは、教員同士の熱い議論も珍しくありません。研究の糧となる刺激に満ちた環境で皆さんを待っています。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

大沼 進 教授 OHNUMA Susumu

■研究分野
環境社会心理学、リスクガバナンス

高橋 泰城 教授 TAKAHASHI Taiki

■研究分野
行動科学、神経経済学

高橋 伸幸 教授 TAKAHASHI Nobuyuki

■研究分野
社会心理学、実験社会科学

竹澤 正哲 教授 TAKEZAWA Masanori

■研究分野
社会心理学、適応的意思決定、文化進化論

結城 雅樹 教授 YUKI Masaki

■研究分野
社会心理学、文化心理学、社会生態心理学

瀧本 彩加 准教授 TAKIMOTO Ayaka

■研究分野
比較認知科学

中島 晃 助教 NAKAJIMA Akira

■研究分野
応用統計学

社会学講座

社会学研究室

社会学研究室では、現代宗教・アジア地域社会・ウェルビーイングなどに関する研究、社会的排除・福祉や医療・質的調査法に関する研究、社会階層・学歴・家族・地域・労働市場などの社会的な不平等および社会意識に関する研究、社会運動・ナショナリズムに関する研究を行っています。

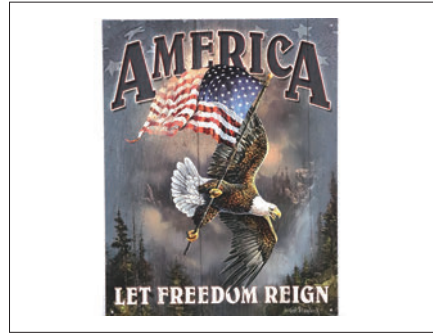
Lab.letters 教員からのメッセージ

伍 嘉誠 准教授

NG Ka Shing

研究内容

香港における社会運動と市民団体（特に宗教団体）との関係について研究しています。また、近年東アジアにおけるナショナリズムの現象についても大変興味を持っています。



▲2019年にアメリカ研修旅行を引率。NYの雑貨店で見つけたブリキ看板のメッセージが気に入り、購入した。



▲研究室の棚に並ぶ関連本。2020年はオンライン・インタビューで現地の声を聞き取っている。

コロナマスクに立ち上がった 香港市民が教えてくれること

香港で最初の新型コロナウイルス感染者が確認されたのは、2020年1月23日のことでした。政府の対応は早く、その2日後に「緊急事態」を発出します。その一方で2019年6月から始まった反政府デモを受けて、政府は同年10月に集会参加時のマスク着用を禁止する「覆面禁止法」を発表していたため、コロナ対策のためのマスク着用の呼びかけやマスク工場の開設を、市民有志が自発的に行うようになりました。

こうした香港の例から見る市民社会の力や社会運動、ナショナリズムを考えることは、自分たちの国や地域で起きているさまざまな問題の解決につながるヒントを秘めており、足元の暮らしと世界が地続きであることを教えてくれます。

北大充実の支援制度を活用 “レンズ”を通して見る社会学

院生時代の5年間で北海道大学で過ごした私にとって、この緑の札幌キャンパスは第二の故郷のようなもの。文学部の「共生の人文プロジェクト」の旅費支援や論文の日本語添削を何度も活用し、海外の学会参加や論文提出をバックアップしてもらいました。

院生当時、指導教員から教わった、社会学で一番大切なことは視点です。研究対象をどういう視点で見つめるかで浮かび上がってくるものが変わり、実際、私自身も日本に来て出身地である香港と距離を置くことで、より客観的に香港社会を観察できるようになりました。これから社会学を学ぶ皆さんもぜひ、いろんな“レンズ”を通して、気になる問題を注視してってください。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

樋口 麻里 教授 HIGUCHI Mari

■研究分野
社会的排除論、福祉・医療社会学、ジェンダー論、家族社会学、国際比較、質的調査法

平澤 和司 教授 HIRASAWA Kazushi

■研究分野
社会学（特に教育、家族、社会階層）、社会調査法

櫻井 義秀 特任教授 SAKURAI Yoshihide

■研究分野
宗教・文化社会学、タイ地域研究、東アジア宗教研究、ウェルビーイング研究

伍 嘉誠 准教授 NG Ka Shing

■研究分野
ナショナリズム研究、社会運動論、宗教・文化社会学、東アジア研究

平松 誠 講師 HIRAMATSU Makoto

■研究分野
都市社会学、地域社会学、計量社会学

地域科学講座

地域科学研究室

地域科学研究室では、フィールドワークを主体として現代社会が抱える多様な地域問題について取り組みます。地域社会学・人文地理学・社会生態学という分野をベースとして、多面的・学際的な議論を交わすなかで社会や環境への理解と考察を深め、問題の解決を図ります。

Lab.letters 教員からのメッセージ

上野 真由美 准教授

UENO Mayumi

研究内容

ニホンジカの個体数推定手法および捕獲技術開発。捕獲政策がニホンジカの個体群動態に与える影響。特定外来生物アライグマの生息状況評価および捕獲事業の効果検証。有蹄類の資源利用に関する国際比較。



▲洞爺湖中島にいるエゾシカ。捕食者が不在の環境において草食動物が増え続け、森林植生を食い尽くすという新たな自然保護問題に直面している。



▲2004年に狩猟免許を取得した。役場や農協、ハンターや生産者など関係者への聞き取りや情報共有を重ね、オール北海道の対策案を模索する。

自然の恵みと脅威は表裏一体 野生動物管理は皆の自分事

北海道の生態系から生まれる様々な恵み享受着している私たちにとって、野生動物の管理は「自分事」である社会問題の一つです。その中でも私の研究は主に2つあり、1つは農林水産省や環境省といった複数の部局と、12の総合振興局・振興局と各市町村が複雑に重なり合う行政の縦断的かつ横断的な連携を築いていく仕組みを提言すること。もう1つは野生動物対策の取り組みを、農業従事者以外の地域住民へと広げていく担い手育成の事例も作ろうとしています。

自然の恵みと脅威は表裏一体。そのことをどこよりも実感できる大地、北海道ならではの社会問題の解決に向けて、関係者と足並みを揃えながら進めています。

助言からさらに踏み込み ともにゴールを目指す伴走者に

一般に研究者というと、社会問題に対して“助言”を求められる立場にありますが、私の場合、同じ野生動物管理に取り組み一員として“一緒に仕事をする”という視点を常に大切にしています。多様な人々と課題を共有し打開策を考える経験は、学問や研究以外の場面でもおおいに生きる学びをもたらしてくれます。

北海道大学の文学部では人類学や博物館学など動物に関する様々な切り口の研究が行われており、社会や地域と対峙する文学部の存在意義を実感できます。自分はどういう視点で動物とヒトの関わりを探ってきたいのか。皆さんが夢中になって取り組めるテーマが見つかったとき、私もその道のりの伴走者としてしっかりサポートしていきたいです。

他の教員のメッセージはウェブサイトにてお読みください。

教員紹介

橋本 雄一 教授 HASHIMOTO Yuichi

■研究分野
都市地理学、地理情報科学 (GIS)

宮内 泰介 教授 MIYAUCHI Taisuke

■研究分野
環境社会学、地域社会学、開発社会学

上野 真由美 准教授 UENO Mayumi

■研究分野
野生動物管理学、個体群生態学、鳥獣行政論

高橋 昂輝 准教授 TAKAHASHI Koki

■研究分野
社会・文化地理学、都市研究、島嶼研究、北米地域研究

林 琢也 准教授 HAYASHI Takuya

■研究分野
農村地理学、経済地理学、観光学、地域づくり論

寺田 千里 助教 TERADA Chisato

■研究分野
保全生態学、環境教育学、野生動物管理



クマ対策を入り口に 人と、地域と手をつなぎたい

人間科学専攻 地域科学研究室 修士課程2023年度修了

伊藤 彩乃 *ITO Ayano*

「大学院在学中に経験できることは全てやりきりたい!」と笑顔で語る伊藤さん。専門の地域科学を柱に、実社会での活躍に必要な知識やスキルを学び、課題解決力を磨いています。

宮内先生がいる北大で 獣害対策を「自分事」に

大好きな動物の生態系や人との関わりを知りたくて帯広畜産大学に入り、ヒグマと人の関係について研究していました。すごく楽しかったんですが、「自分はコレを学んだ!」という実感が持てないまま卒業するのはもったいない。次は研究をしっかりやりたいと思い、環境保全に関するご著書を読んで感激した宮内泰介先生がいる北大の文学院に入学しました。

クマを含む獣害対策は行政が動くだけでなく、市民との協力が必要不可欠です。近年は少子化やコミュニティの希薄化といった地域の課題を絡めた獣害対策も進んでおり、私もフィールドである浦幌町で現地の課題を聞き取っています。私自身、北海道に来て初めてクマのことを考えるようになりました。町の方々にとってもクマ対策を改めて「自分事」として考えるきっかけを提供できたらと思っています。

教養深化プログラムや CoSTEP、集中講義も受講

北大に入って実感したことは、「チャレンジする機会がとて多い!」ということです。専門の地域科学の他にも、現代の大学院生が求められている実社会で活躍できる総合力をつけるための教養深化プログラムや科学技術コミュニケーションのCoSTEPなど、どれもまさに自分が知りたいこと、身につけたいことばかり。自分がやりたいと思ったことにすぐに踏み出せる北大でもっともっと成長したい。いろんなことを経験しておきたいと思い、ちょっと欲張りすぎかなと思うくらい授業を詰め込んでしまいました。

講義やフィールドワークを通して、今その地域で何が起きているかを「伝える」ことの重要性を学び、就職もできれば広報やメディア、あるいは行政職に関する分野に進めたらと考えています。北大に来たからこそ出会えた人や経験は私の宝物。これからもずっと大切にしていきたいです。

PROFILE

1999年愛知県生まれ。帯広畜産大学畜産学部卒業後、北海道大学大学院文学院修士課程に進学。浦幌町をフィールドにヒグマと人の関係について研究するかわら、教養深化プログラムも受講。科学技術コミュニケーション教育研究部門CoSTEP本科修了生。修了後、愛媛県久万高原町にて地域おこし協力隊として活動中。
X: 彩乃 | 久万高原町地域おこし協力隊 Instagram: くまぐらしの記録



＼ ここをチェック! /

入試対策

地域科学の基礎知識と過去問の勉強会

学部で生態学は学んでいましたが、文学院で新たに学ぼうとしていた地域科学については全くのゼロスタート。宮内先生に聞いていた参考図書を読み込んで基礎的なことを頭に入れておきました。環境問題に関心がある友人たちが過去問題を一緒に解く勉強会を開いて応援してくれたのも、すごく心強かったです。

北大入学のきっかけになった宮内先生の著書。



興味がある授業は迷わず受講。
専門分野が異なる学生と話せるのも楽しいです。

Weekly Schedule 〈修士課程1年:1学期の場合〉

「少しでも『面白そう!』と思った授業は学部でも他の大学院でも受講しています!」という言葉通り、毎日、学部生並みに埋まっている充実のスケジュール。

MON	大学院授業「実践環境科学チーム活動実習」	この他にオンデマンド必修科目を3つ、教養深化プログラムの「キャリアマネジメントセミナー」や特別演習「伝える媒の技術」、環境科学院の集中講義「実践環境科学実習I」、Hokkaido Summer Instituteの外来種管理に関する集中講義を受講しました。
TUE	大学院授業「地域科学特殊講義」「地域環境学特別演習」「社会生態学特別演習」	
WED	大学院授業「開発社会学特別演習」、CoSTEP	
THU	大学院授業「地理学特別演習」「地域調査特別演習」、学部授業「地域科学演習」TA	
FRI	大学院授業「経済地理学特別演習」	
SAT	CoSTEP	

Annual Research Plan 年間計画 〈修士課程1年の場合〉

2022年5月	環境科学院の先輩のヒグマ生態調査、文学院の先輩の参与観察調査(田植え@美瑛市)、宮内先生・環境省のゼニガタアザラシ被害聞き取り調査に同行。CoSTEP受講スタート。	
6月	環境科学院の集中講義ワークショップに参加。橋本雄一先生のゼミでニセコ町にエクスカージョン(野外調査)。	
7月	文学部のゼミで中頓別町の聞き取り調査実習。	
8月	札幌市石山地区で熊対策草刈りのお手伝い。Hokkaido Summer Instituteの外来種管理に関する集中講義を受講。浦幌町で約20日間のフィールド調査。	聞き取りさせていただく農家さんのお手伝いもします。
9月	浦幌町フィールド調査。教養深化プログラム集中講義「伝える媒の技術」。	小学校での出張授業もやらせてもらいました。
10月	富山県で一般の方向けクマイベントのお手伝い。野生動物と社会学会に参加。	
11月	旭川のヒグマフォーラムに参加。環境系エンターテイナーWOWキツネザルさんのヒグマドキュメンタリー動画撮影に同行。	
12月	書香の森ギャラリートーク“「深」動物撮影 関係論 ―写真家 高橋忠照と出会った動物たち―”開催スタッフ。	悲しい事故を防ぐためにも適切なクマ対策が必要です。
2023年2月	浦幌町フィールド調査。	
3月	札幌のヒグマフォーラムで研究発表、HBC企画ヒグマイベントのお手伝い。NHK帯広主催ヒグマイベント運営お手伝い・研究発表。CoSTEP修了式。	

「クマに関することなら何でも参加したい」伊藤さんの行動力で実現した年間スケジュール。「たくさんのお会いといろんな意見を吸収して、自分の中の正解を疑うことに気づけた。視野が広がりました」。

研究環境 一人ひとりの学びを応援！

在学生のための情報とアーカイブが充実 〈ウェブサイト〉 www.let.hokudai.ac.jp/



研究情報を中心に発信している公式 Facebook もご覧ください。
<https://www.facebook.com/Hokudai.Humanities.HumanSciences/>

公式 Instagram
https://www.instagram.com/hu_bungaku/

文学研究院・文学院・文学部のウェブサイトでは、大学院生や大学院を志す皆さんに役立つ最新情報や、アーカイブを充実させています。セミナー、大学院進学説明会、支援情報などを活用して、研究発表や進路選択に役立ててください。



▲文学研究院・文学院・文学部公式Xは、研究情報、学内行事など学生向け情報を中心に更新、緊急時の情報共有メディアとしても利用します。

文学部紹介動画「#北大#文学院#ほんもの」
<https://youtu.be/yGC6LR5dOm8>

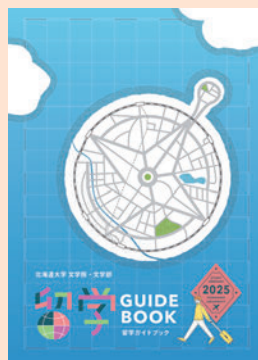


人と情報の交差点エントランスホール



文学部・文学部のエントランスには、「書香の森」と名づけた書棚と展示棚を設置しています。各教員の研究の集大成とも言える著書を展示する他、企画展示や教員が自著を紹介する読書会も行います。展示コーナーは、複数の研究室の大学院生が連携して研究成果を展示するアウトリーチの場として活用されています。

きめ細やかな留学支援



文学院・文学部では、教務担当が国際交流に関わる業務、留学生受入、在学留学生の支援などを行っています。また、交換留学に関する情報提供、大学院生・学部生の交換留学の申請手続き支援、協定校への仲介などを行っています。



▲文学院・文学部生のための「留学ガイドブック2025」公式ウェブサイトにて公開中

国際担当教員

ラフェイ・ミシェル 教授 LA FAY Michelle
■研究分野
日本におけるプロテスタントキリスト教、内村鑑三

国際担当教員

小川 佐和子 准教授 OGAWA Sawako
■研究分野
映画史、音楽劇研究

教養深化プログラム担当教員

平川 全機 特任助教 HIRAKAWA Zenki
■研究分野
環境社会学、災害と復興の社会学、リスクコミュニケーション

常に机が確保できる院生研究室



研究室ごとに「院生研究室」を設置しており、ひとりが一台の机で勉強できるよう十分な設備を整えています。なかには個人ロッカーや個人の本を置ける開放書棚がある部屋も。文学院内で腰を落ち着けて読書、思考、執筆ができると、院生に好評です。

若手研究者を応援！研究推進室



大学院生の旅費支援・校閲費支援の窓口、申請書の書き方セミナー等各種セミナーの企画実施のほか、リサーチ・アシスタント (RA) のアウトリーチ支援、若手研究者支援情報の提供など、大学院生やポストドクのみさんの研究活動をバックアップしています (p.07-p.08)。

関連組織

文学研究院内センター



応用倫理・応用哲学研究教育センター

本センターの目的は、応用倫理、応用哲学、ジェンダー・セクシュアリティ、死生学に関する研究・教育を推進することにあります。2007年4月に「応用倫理研究教育センター」として設置され、応用倫理の研究教育に携わる、国立大学では初の常設機関として活動を開始しました。2008年度よりジェンダー・セクシュアリティに関わる研究教育も活動範囲に加え、さらに2018年度には「応用倫理・応用哲学研究教育センター」へと改称し、「応用哲学」と「死生学」も研究領域に加え、現在に至っています。



北方研究教育センター

北方研究教育センターは、文学研究院が対象とする歴史、文化、言語、芸術、文学、考古、環境、地理、動物心理など広範な視点から「北方研究」を捉え、研究・教育を進めています。対象地域は、北海道やロシア・スラブ圏をはじめ、北欧、北米、北極にも及び、さまざまな大学や研究機関との共同研究や交流の拠点となっています。また、雑誌『北方人文研究』の発刊、シンポジウムや研究会などの企画・運営を行っています。

学内共同施設



社会科学実験研究センター

社会科学実験研究センター (CERSS) は、先端的な社会科学実験を展開する日本唯一の専門機関であり、国内外の主要研究拠点と連携するハブとしての役割を担っています。将来を嘱望された研究者の受け皿としても機能しています。心理学・認知科学・脳科学と、経済学、法学、政治学を含む社会科学諸分野との接合を図ると同時に、当該分野における若手人材の育成、研究成果の国内外への発信を行い、実験社会科学の発展に寄与しています。



人間知・脳・AI研究教育センター

人間知・脳・AI研究教育センターは、新しい「人間知」の創成という理念のもと、数千年来の知の伝統を受け継ぐ人文社会科学と、急速に進展しつつある脳科学 (神経科学)・人工知能 (AI) の知が高度なレベルで融合する文理融合型研究・教育を行うセンターです。脳科学 (神経科学) と AI 研究の急速な進展により、旧来人文社会科学が扱ってきた「人間」への問いが新たな仕方です。この挑戦に答え、文理の境界を超えた先端的研究のプラットフォームを作ることを目指します。国内外から最先端の研究者を招聘して行うサマースクール・ウィンタースクールを中心に、プログラムに所属する大学院生は刺激に満ちた共同研究に参画し、国内外の研究室・企業へのインターンシップを行うことができます。

学生生活

札幌の中心部に緑のキャンパス

北海道大学は札幌の中心部という恵まれた立地にあり、緑豊かなキャンパスが広がっています。交通網の要であるJR札幌駅からも徒歩圏にあり、通学にも便利です。大学周辺は学生街として発展しています。大学の関連施設は、約150年に及ぶ知の探求の歴史を伝える総合博物館や、市民の憩いの場としても親しまれている植物園、交流の場を創造するコンベンション施設やセミナーハウス、山小屋など。道外には東京オフィスがあり、出張や就活時の拠点として活用されています。留学希望者への情報提供、留学実現に向けての具体的な手続きの支援は、国際連携機構のリクルーティングオフィスが行っています。



大学寮や保育施設も利用可能

北海道大学には男女学部生と男子大学院生用に^{ひいてきりょう}恵迪寮、女子学部生と女子大学院生用には^{そうせいりょう}霜星寮があります。他に札幌市内に公・私設寮が10カ所以上あり、北海道大学生協同組合では下宿・貸間・寮等の紹介も行っています。外国人留学生に対しては、4カ所の留学生用宿舎があります。また、学内には札幌市認可保育園「子どもの園」と事業所内保育所「ともに」の2カ所の保育施設があります（定員の空き状況により入所できない場合があります）。

困ったり悩んだりした時には

北海道大学の「学生相談総合センター」では修学、進学、就職などの進路相談に加え、家庭や友人関係などの個人的な問題も相談できます。ハラスメントに関することも相談員の先生が常時対応しています。文学院の建物内にも学生相談室があり、週2回相談を受け付けています。「保健センター」では、健康管理のための定期健康診断や健康診断書・健康診断証明書の作成、学生の健康相談および診療を行っています。

課外活動・ボランティア活動

学生の自主活動として文化系51、体育会系68、その他1の公認学生団体があり、分野を超えた交流の場となっています。例年6月の大学祭をはじめ、学内外での体育大会やスポーツイベントもあります。ボランティア活動に関心がある方は「学生ボランティア活動相談室」の活用をおすすめします。

研究に集中できる経済支援

経済的理由により入学科、授業料の納付が困難な場合、入学科、授業料減免の制度を利用することができます。また、各種奨学金制度[※]や奨励金の機会もあり、研究に集中できるよう経済的に援助する各種支援制度も導入しています。他に大学院生を対象としたティーチング・アシスタント（TA）やティーチング・フェロー（TF）、リサーチ・アシスタント（RA）の制度があり、給与（謝金）を受けながら、教育や研究の補助的作業を通じて教育・研究のスキルを高めていくこともできます。博士後期課程学生向けに研究費と生活費相当額を支給するフェローシップ制度も拡充されています。

※参考：日本学生支援機構奨学金貸与月額（2025年度）

	修士課程	博士後期課程
第一種奨学金	50,000円または88,000円	80,000円または122,000円
第二種奨学金	50,000円、80,000円、100,000円 130,000円、150,000円のいずれか	

DATA

▶ 文学院「FAQよくある質問」→北大大学院文学院ウェブサイトTOP→[入試情報]→[よくある質問]
入試から生活まで幅広いFAQ集

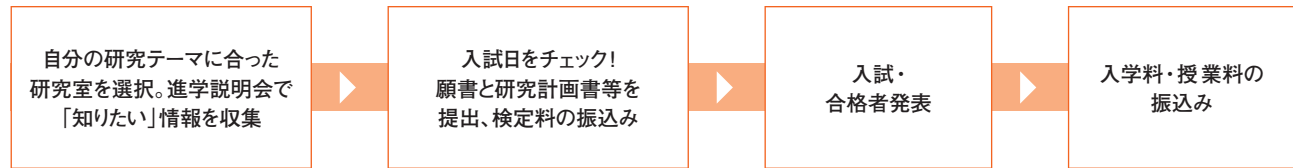
▶ 北海道大学「学生生活」北海道大学ウェブサイトTOP→[学生生活]
さまざまな学生生活情報を網羅→<https://www.hokudai.ac.jp/gakusei/>

入試から入学まで

- 入試前に志望する研究室の教員や先輩にコンタクトを取り、研究テーマや方法、入試準備について十分な情報を集めておきましょう。オンラインで行う大学院進学説明会では研究環境の他にも研究計画書の書き方や学生生活など幅広い相談を受けています。
- 入学試験は、博士後期課程、修士課程ともに年2回（9月、1・2月）実施しています。出願に関する詳しい 情報が記載された募集要項と過去の入試問題などは文学院のウェブサイトに掲載しています。



▲募集要項



2025年（令和7年）度実施の入試カレンダー

	2025年							2026年	
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
オンライン 進学説明会	20日 オンライン実施					14日 オンライン実施			
修士課程		16日～30日 インターネット 出願登録期間 23日～30日 出願書類提出期間		20日 試験日	3日 合格発表		12月24日～1月9日 インターネット出願登録期間 1月5日～9日 出願書類提出期間 1月31日 試験日		19日 合格発表
博士 後期課程		2日～16日 インターネット 出願登録期間 9日～16日 出願書類提出期間		21日 試験日	3日 合格発表		12月24日～1月9日 インターネット出願登録期間 1月5日～9日 出願書類提出期間		4日 試験日 19日 合格発表

大学院入試情報 北大大学院文学院ウェブサイトTOP→[入試情報]→大学院文学院入試情報

多忙な社会人に配慮した「長期履修制度」

主に時間的制約の多い社会人の修学に配慮したもので、申請条件を満たせば標準の修業年限より長い期間をかけて計画的な履修を認める制度です。詳細は、北大大学院文学院ウェブサイトTOP→[文学院]→[長期履修制度]

DATA

- ▶ 検定料:30,000円 入学科:282,000円 授業料:535,800円
（入学科・授業料は改定されることがあります。募集要項で事前にご確認ください）
授業料は前期、後期に分けて払います。また、減免制度、奨学金制度などがあります。
- ▶ 入学状況
https://www.hokudai.ac.jp/introduction/pdf/20240726_gaiyou.pdf#page=42
- ▶ 卒業・修了者数（学位授与数）
https://www.hokudai.ac.jp/introduction/pdf/20240726_gaiyou.pdf#page=43

MEMO

- ▶ 研究生
特定の専門事項について研究を希望し、一定の条件を満たしている方を「研究生」として受け入れています。単位を修得したり学位を取得することはできません。
- ▶ 聴講生・科目等履修生
授業科目の聴講または履修を希望し、一定の条件を満たしている方を「聴講生」、「科目等履修生」として受け入れています。科目等履修生は学期末試験等に合格した場合、教授会の承認を経て、所定の単位を得ることができますが、学位を取得することはできません。



文学院進学希望者向けのまとめ情報は、右のQRコードよりご覧いただけます <https://www.let.hokudai.ac.jp/general/gshhs-portal>

免許・資格

文学院在籍中に中高教員免許状の他、学芸員の資格、専門社会調査士資格、1級考古調査士資格が取得できます。詳しくは入学時に配られる「学生便覧」を参照し教務担当に相談してください。

●教育職員免許状一覧

- (1) 中学校教諭一種免許状 [国語、社会、英語]
- (2) 高等学校教諭一種免許状 [国語、地理歴史、公民、英語]
- (3) 中学校教諭専修免許状 [国語、社会、英語]
- (4) 高等学校教諭専修免許状 [国語、地理歴史、公民、英語]

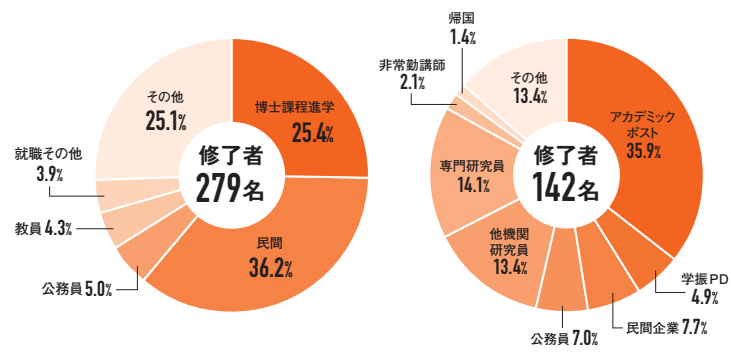
●学芸員 ●専門社会調査士 ●1級考古調査士

進路動向

〈修士課程〉過去3年間の進路

	修了者数	博士課程進学	就職	その他
令和4年度	85人	22人	29人	34人
令和5年度	98人	32人	51人	15人
令和6年度	96人	17人	58人	21人
過去3年間平均	—	25.4%	49.5%	25.1%

※その他の内訳：帰国、大学院等受験準備、研究生など。



〈博士後期課程〉過去5年間の進路

※日本学術振興会特別研究員や専門研究員を経て就職したケースも含む（修了後5年以内）。
※単位修得退学者の進路も含む。

●アカデミックポスト

愛知淑徳大学 学修教育支援センター 常勤講師、大阪大学大学院 人文科学研究科 講師、金沢大学 人間社会研究域 准教授、京都大学 人文科学研究所 助教、札幌大谷大学短期大学部 保育科 講師、就実大学 人文科学部 講師、尚絅学院大学 総合人間科学系 講師、星槎道都大学 社会福祉学部 専任講師、筑波大学人間系 助教、東京都市大学 デザイン・データ科学科 准教授、同志社大学 社会学部 助教、名古屋大学大学院 情報学研究科 特任助教、新潟大学 文学部 准教授、梅花女子大学 文化表現学部 准教授、福山大学 人間文化学部 講師、別府大学 文学部 講師、北海道教育大学釧路校 講師、北海道大学 アンビシャス特別助教、北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター 特任助教、北海道大学 総合博物館 助教、北海道大学 人間知・脳・AI研究教育センター 特任助教、北海道大学 文学研究院 講師、北海道大学 文学研究院 准教授、北海道千歳リハビリテーション大学 共通教育 助教、北海道武蔵女子大学 経営学部 助教、早稲田大学 教育学部 助教

〈中国〉廈門大学电影学院 助理教授、広東外語外貿大学 講師、貴州大学哲学学院、湖北民族大学外国語学部 日本語科 講師、四川師範大学、西安音楽学院 人文学院 講師、西安外国語大学 日本文化経済学院 講師、浙江師範大学 心理学院 講師、浙江伝媒学院 講師、汕頭大学 法学院公共管理学科 講師

〈スペイン〉サラマンカ大学

●日本学術振興会特別研究員(学振PD)

金沢大学、京都大学、筑波大学、東京大学、東北大学、南山大学

●民間企業

SAP ジャパン (IT コンサルタント)、コプさっぽろ生活協同組合、シン技術コンサル、スポーツニッポン新聞社、駿台予備校 (講師)、ダイワロイネットホテル、ニチリョク、日本電信電話株式会社 (研究開発)、パーソルプロセス&テクノロジー (システムインテグレーター)、VISHU

〈中国〉シーダースコミュニケーションズ

●公務員

札幌有成園、鹿追町立神田日勝記念美術館、徳島県立鳥居龍藏記念博物館、美幌博物館、北海道丘珠高等学校

●博士研究員

大阪大学 医学系研究科、京都大学高等研究院、国立情報学研究所、玉川大学脳科学研究所、帝京大学、東京外国語大学 総合国際学研究院、東京大学 国際高等研究所、人間文化機構 人間文化研究開発センター、広島大学 大学院人間社会科学研究科、北海道大学 文学研究院、北海道大学 人間知・脳・AI研究教育センター、北海道大学 国際連携研究教育局 (GI-CoRE)、北海道大学 アイヌ・先住民研究センター、北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター

〈中国〉浙江大学 外国語文化国際交流学院、海南大学

〈台湾〉国立中央大学 人文社会科学高等研究センター

〈フィリピン〉フィリピン国立博物館

〈英国〉サセックス大学

●文学研究院専門研究員

●その他

イラストレーター、神主、サイエンスライター、通訳、俳人、翻訳家、他大学大学院進学

●北海道大学キャリアセンター

学生とのコミュニケーションを大切にしながら就職活動をバックアップ。就職相談や就活指導、就職情報の配信ほか、公務員受験や教員採用試験も応援しています。

修士課程修了者の就職先 過去3年間

官公庁	学術研究、専門・技術サービス業	情報通信業	製造業
愛媛県久万高原町地域おこし協力隊 外務省 仙台市 総務省 北海道森林管理局 北海道庁 松本市役所 夕張市役所	アクセンチュア あずさ監査法人 アビームコンサルティング 愛媛県美術館 小樽市総合博物館 科学技術振興機構 札幌市芸術文化財団 札幌市芸術文化財団札幌芸術の森 さっぽろ青少年女性活動協会 産業技術総合研究所 自営業(デザイナー) 電通 日本学術振興会 日本国際協力センター (JICE) 日本総合研究所 PwCコンサルティング PIGNUS ビジョン・コンサルティング 日高町立門別図書館郷土資料館 平取町立二風谷アイヌ文化博物館 北海道大学大学院医学研究院 北海道博物館 北海道立北方民族博物館 マクロミル	アイヴィス 朝日サービス ESRIジャパン エヌシーアイ総合システム NTTデータMSE クリプトン・フューチャー・メディア KDDI K-BIT 尚文出版 小学館集英社プロダクション cinra Speee セーフィー ソフトウェア・サイエンス ダイテック 中日新聞社 TIS デジタルデータソリューション 東映ビデオ 日本放送協会 (NHK) 日本アイ・ビー・エムデジタルサービス パクテラ・テクノロジー・ジャパン 東日本電信電話 ファームノート フジテレビジョン ブックスポックス ベネッセコーポレーション 北海道新聞社 ミックウェア モンスタースタボ	岩塚製菓 SUBARU セイコーエプソン THK TDK TOPPAN 日産自動車 三井ハイテック レゾナック
教育・学習支援業	建設業	金融・保険	農業・林業
神奈川県教育委員会 (高等学校教諭) 吉祥女子中学高等学校 金光大阪中学校・高等学校 札幌日本大学高等学校 北海道高等学校 中学校教諭 日本語教員 (中国)	共同エンジニアリング 世紀東急工業	農林中央金庫 PayPay銀行 みずほ銀行 (中国) 有限公司	雪印種苗
医療・福祉	運輸業・郵便業	不動産	医療
	北海道エアポート	ウインドワード JWB 都市再生機構	中村記念病院
卸売業・小売業	卸売業・郵便業	不動産	医療
自営業 (茶葉の販売等) シロ トゥモローランド 東急百貨店 良品計画 ルビシア			

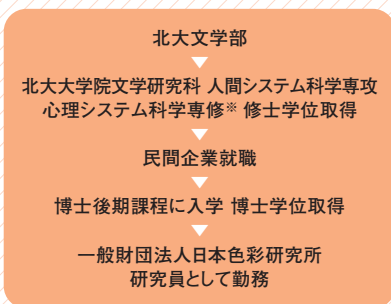
博士後期課程 修了者の声

色彩の専門家として鍛えられた実験・分析手法で
現代社会のニーズに即応

高校生のときに色彩検定という試験を知ったことから、学問としての色彩に興味を持ったのが研究のきっかけです。在学中は認知心理学領域で色彩について研究されている川端康弘教授の下で学び、実験を計画することや得られたデータの分析といった研究の面白さに惹かれて大学院進学を決めました。大学院では、物体の色に関する既存の知識が、実際に見た色の記憶の変容にどのような影響を及ぼしているかを研究しました。修士課程修了後に一度民間企業に就職しましたが、認知心理学の色彩分野の専門家になりたいという思いから博士後期課程に進学し、研究を続けま

した。自主性を尊重する環境で、自由な発想を取り入れて研究ができたことはとてもありがたかったですし、その経験が今の職場でも活かされていると思います。研究所では、企業や自治体などの委託を受け、心理調査・実験から色彩効果の検証や配色提案などを行っています。食品や生活用品、景観など、大学の研究では出会うことのなかった分野と色彩との関係についての知見が得られること、現代社会のニーズを速やかに調査できることが民間の研究所の強みです。また研究所独自の調査の他、北大との共同研究も進めています。

一般財団法人日本色彩研究所 研究員
佐々木 三公子 さん [2017年度修了]



※2019年4月の改組により、文学研究科は文学部に、人間システム科学専攻は人間科学専攻に、心理システム科学専修は心理学研究室になりました。

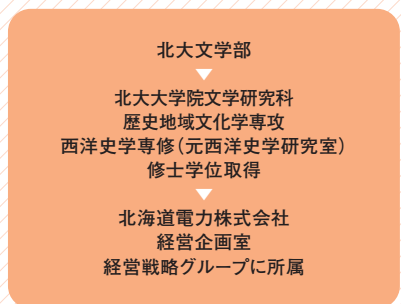
修士課程 修了者の声

調べ、読み解き、論理的に表現する経験が
経営戦略立案の土台に

映画「グラディエーター」等を通じて古代ローマ史に関心を持ち、西洋史学研究室を選択しました。学部時代に「古代ローマの奴隷制」研究に必要な英語や古代ラテン語等の語学力を高め、大学院時代の2年間は研究内容を深めました。大学院で得た学びは、研究の中で計画的にPDCA サイクルを回して、課題を見抜き、その解決に向けたプロセスを反復することで身につけた論理的な思考力と実践力です。現在は当社の更なる企業成長の実現や北海道経済の更なる成長・発展への貢献に向けて、当社グループ経営目標の設定・管理および経営分析等の業務を担当して

おり、大学院で培われたこれらの力が大いに役立っています。さらに、インプット力とアウトプット力も鍛えられました。終年劣化により欠損が多い古代ラテン語資料を前後の文脈等から類推し読み解いた経験や、修士論文をロジカルに組み立てた経験が、社内外に向けて資料を作成し、説明を行う場面等で活かされています。皆さんも研究職と民間企業就職のいずれを選択するかを問わず、人生を送るうえで譲れないポイント・大事にしたいポイントを常に意識し、実りの多い学生生活を過ごしてください。

北海道電力株式会社 経営企画室 経営戦略グループ
前田 悠太 さん [2013年度修了]



※2019年4月の改組により、文学研究科は文学部に、人間システム科学専攻は人間科学専攻に、心理システム科学専修は心理学研究室になりました。

その他の修了者の声は、右のQRコードよりご覧いただけます。 <https://www.let.hokudai.ac.jp/interview/category/dc-graduate>



その他の修了者の声は、右のQRコードよりご覧いただけます。 <https://www.let.hokudai.ac.jp/interview/category/mc-graduate>



Access



文学院周辺地図



国立大学法人
北海道大学 大学院文学院

〒060-0810 札幌市北区北10条西7丁目

連絡先 文学事務部教務担当

電話 011-706-3005 / 011-706-3004 (直通)

URL <https://www.let.hokudai.ac.jp/>

Graduate School of Humanities and Human Sciences,
Hokkaido University
Kita 10, Nishi 7, Kita-ku, Sapporo, 060-0810 Japan

○制作・発行 北海道大学 大学院文学研究院
○編集担当 林寺正俊・松嶋明男・川崎公平・伍嘉誠 (広報誌専門部会)
飯塚理恵・森岡和子 (研究推進室)

○企画・編集 株式会社スペースタイム
○デザイン 株式会社デクスチャー
○教員紹介記事構成 佐藤優子 (p13、p16、p20、p34除く)

■本誌に掲載されている情報は2025年6月現在のものです。
■本誌の無断複写 (コピー)・転載は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

